

『あなたがたの内におられるキリスト、栄光の希望』

エウカリスティア、教会の宣教の源泉と頂点

2016年1月24日-31日、
フィリピン、セブにおける
第51回国際聖体大会を準備するための神学的・司牧的省察

目次

一 序文	
A 国際聖体大会	3
B 第51回国際聖体大会の意義.....	3
C 教会のいのちへの影響	3
D セブでの大会とアジアの民.....	4
二 エウカリスティア——キリストのあがないのみわざの実現	
A 「神秘…あなたがたの内におられるキリスト、栄光の希望」(コサイ1・24—29)	5
B 宣言された神秘——すべてのものがキリストを受け容れるでしょう	6
C エウカリスティア——わたしたちの間に現存されるキリスト	6
三 エウカリスティア——教会の宣教の源泉と頂点	
A 愛の秘跡、一致のしるし、慈愛の絆としてのエウカリスティア	8
1 エウカリスティアにおけるキリストの現存	8
2 聖霊の変容させる力.....	8
3 変容され、変容するために遣わされる	8
B エウカリスティアと宣教.....	9
1 開祭.....	9
2 ことばの典礼.....	10
3 贈り物の奉納.....	10
4 エウカリスティアの祈り（奉献文）	11
5 聖体拝領（コムニオ）	12
6 閉祭——「イテ・ミサ・エスト」	13
四 アジアにおける教会の宣教——対話における宣教	
A 宣教の特別優れた方法としての対話	16
B 宣教における対話の諸要素	16
C 宣言と対話について	17
D 対話の源泉であり頂点であるエウカリスティア	18
五 諸国の人々と文化との対話を通しての宣教	
A インカルチュレーションと宣教	20
B アジアの諸文化との教会の対話における民間信仰.....	21
C 諸文化との教会の対話におけるエウカリスティア	22
六 諸宗教ならびに宗教的諸伝統との対話における宣教	
A いのちと心の対話.....	25

B	あかしを優先すること	26
C	一致とキリスト教の希望.....	26
D	他の宗教的諸文化との教会の対話におけるエウカリスティア	26
七 貧しい人々との対話における宣教		
A	貧しい人々を優先すること	27
B	暗示しているものと結果.....	27
C	貧しい人々のための召命への応答——彼らのために働き、彼らとともに歩むこと	28
D	貧しい人々との教会の対話におけるエウカリスティア	29
八 若者との対話における宣教		
A	教会の未来と現在.....	30
B	若者と「良い土壌」となる課題	30
C	若者の養成.....	30
D	第一の担い手ならびに働き手.....	31
E	若者との教会の対話におけるエウカリスティア	32
九 教会の宣教における聖母マリアとエウカリスティア		
A	マリア——宣教する教会の模範であり御母.....	34
B	教会の宣教としての対話におけるマリア.....	35
C	教会の宣教におけるマリアとエウカリスティア	37
十 栄光の希望		
A	エウカリスティアと神の栄光	38
B	メシアの祝宴.....	38
C	神の愛は人類を抱きしめる	39

一 序文

A 国際聖体大会

国際聖体大会は停留所、つまり旅路での一時休息のようなものであることを目指しています。一つの地方教会の共同体が、エウカリスティアを囲んで式典を行い、エウカリスティアの秘義のうちにおられる主のみ前で賛美をささげ祈るために集まります。その教会共同体はこの聖なる行事へと、近隣の地方教会、ならびに全世界の他の教会共同体を招きます。それは、国際聖体大会が普遍教会の行事となることを目指すものだからです。[聖体] 大会の式典のための『儀式書』(1)は、感謝の祭儀が大会そのものにおいて真の中心的な位置を占めるよう求めています。すべてはそれを目指し、それを準備するものなのです。

エウカリスティアの秘義の深い理解ならびにそれとの力強い結びつきは、カテキズムの会期（セッション）、みことばの祭儀、祈りの集会、そして全体集会を通して育成されます。これらのために、また大会に関連する他の諸行事のために、あらかじめプログラムが用意されていなければなりません。そのプログラムは、式典、集会、行列、祈り、所定の聖堂もしくは他の礼拝のための場に顕示された至聖なる秘跡（聖体）の前での礼拝のための主題（テーマ）が明確に表現されていなければなりません。

大会のすべての構成要素と詳細は「エウカリスティア的教会論」という基本的なヴィジョンを明らかにするものでなければなりません。それは、教会という共同体における交わりと一致を目指し、当然なことではありますが、すべての人、とくに社会の周辺に追いやられた人々にまで及ぶことを求めます。すべての人を連れ戻し、唯一の牧者イエス・キリストのもとにただ一つの群れとなる〔ヨハネ 10・16〕ことを目指しているのです(2)。

B 第 51 回国際聖体大会の意義

2016 年のセブ市における国際聖体大会にあたって、世界のあらゆる地域からやって来る巡礼者たちは、フィリピンの信者たち、とくにセブの信者たちとともに集まることになるでしょう。この国際的な集会は、キリスト・イエスにおける交わり、そしてこの地の教会が全世界からやって来るすべてのキリストの弟子たちに差し出す信仰と愛の一致の真のしるしとなるでしょう。

この大会は、歴史の流れの中で旅を続ける神の民全体に奉仕することを意図しています。これは、式典、教え、友好的な交わりを通して、全世界の教会が「エウカリスティア」こそ自身のいのちと活動の「源泉であり頂点」(3)であるという自覚を得ることになる、偉大な教会の行事であります。エウカリスティアは、キリスト者のいのちと礼拝行為において、ひととき優れた「終末的出来事」である過越の秘義を絶えず新たにし、恒久的に臨在するものとして明確に示されるでしょう。

C 教会のいのちへの影響

セブにおける第 51 回国際聖体大会の大きなテーマは「あなたがたの内におられるキリスト、栄光の希望。エウカリスティア、宣教の源泉と頂点」というものです。聖パウロのコロサイの信徒にあてた手紙から取られた(1・24—29) このテーマは、時間と永遠との双方において、エウカリスティア、宣教、キリスト者の希望との間の結びつきに十分な光を当てることを意味しています。今日、おそらくこれまでの歴史においてかつてなかったほどに、世界中に希望の欠落がみられます。それゆえ、人類はイエス・キリストのわたしたちの希望というメッセージを聞く必要があります。教会は、刷新された熱意をもって、新しい方法と表現を用いて、今日、このメッセージを宣言しなければなりません

(4)。「新しい福音宣教」の精神をもって、希望のこのメッセージをすべての人、とくに「洗礼を受けながら、教会から離れ、キリスト教的生活を送っていない人々」(5)に対して伝える努力をしなければなりません。

第 51 回国際聖体大会は、参加する人々に、そのことごと、ご自分のいのちをお与えになる自己犠牲のうちに主と出会い、変えられるものとしてエウカリスティアを理解し体験する機会を提供することを目指しています。わたしたちがいのちを得るため、それも豊かにいのちを得るためです(ヨハネ 10・10 参照)。それはまた、信仰の発見ならびに再発見の機会となることを目指しています。信仰こそ、「個人と家庭と社会の生活に喜びと希望をもたらす源泉だからです」(6)。この国祭的な集会は、信仰と福音的価値観に対してますます無関心で敵対的になっている世界と社会においてキリスト教を宣教するための勇気ある決定的な一歩を踏み出させることを約束します。エウカリスティアにおけるキリストとのこの出会いは、聖霊の力を通して、わたしたちが出会っている方[キリスト]の似姿へと変えられた者として、受容、ゆるし、癒し、愛、そしてわたしたち自身が受け、かつ体験したすべてを、最も必要としている人々のもとに携えて行くという、わたしたちの熱意をもって世界を変える宣教へとわたしたちが向かうとき、世界にとって希望の源泉となりうるでしょう。

D セブでの大会とアジアの民

第 51 回国際聖体大会は、フィリピンの歴史における教会と信仰の位置を考えると、ひとときわ輝かしく効果的な方法で、キリストの神秘を宣言することになるはずですが、フィリピンにおける教会は、アジアにおいてキリスト教を宣教するという摂理的な召命を帯びています。この召命はローマの教皇たちによって一貫して確認されたものです(7)。教会ならびに司牧面での事柄を含めて、社会のさまざまな分野へのカトリック信徒の進出と関わり合いは、パンの練り粉におけるパン種のように、社会・政治的、経済的な面で影響を及ぼす力を有しています。貧困と雇用の機会の欠乏は多くのフィリピンの人々をアジアの内外の諸国への移住を強いるものになっていますが、移住するとき、彼らは自分たちのキリスト教信仰を携えていき、おそらくは彼らの言葉による以上に、彼らの模範によって、彼らがともに、あるいはその人々のために働く人々とキリスト教信仰を分かち合うこととなります。したがって、フィリピンの教会は、1970 年にフィリピンを訪問したおりに教皇パウロ六世が発言されたように、「あなたがたの内におられるキリスト、栄光の希望」として、まさしく特別な形で希望の源泉であるのです。

1937 年に、マニラはアジアで最初の、第 33 回国際聖体大会の開催地となりました。成功裏に進行したその大会は、その時点で、その地で開催された国際的宗教行事として最も重要なものであったことは確かです。2016 年に開催されることになる第 51 回国際聖体大会はそれに勝るとも劣らない重要性を持つことが約束されています。それは、フィリピンのキリスト者たちがその地にキリスト教の信仰と教会とが到来した 500 周年を記念する 2021 年に向けての準備である「九年のノヴェナ」の一環を形作ることとなります。

1521 年、セブの国王と王妃とはスペインの宣教師によって洗礼を受けられました(8)。現地の人々は、彼らの深い本性的な信仰心のために、かなり容易に、また熱狂的にキリスト教信仰を受け入れました。彼らの初歩的な信仰は諸秘跡が 20 世紀初頭まで大多数の人には理解できない言語(つまりラテン語)で執行されていたにもかかわらず、何よりもとくに聖なるミサによって育まれました。

著しく短い期間で定着した、この地のキリスト教は、フィリピンを世界のこの地域(すなわちアジア)における最も大きなカトリック国——人口の 80%が洗礼を受けています——としました。フィリピンのカトリック信者は、この数世紀にかけて、感謝の祭儀に関しての考察を深めてきました(9)。典

型的な小教区での生活と活動は、それが霊的なものであれ社会的なものであれ、また奉仕を目的とするものであれ、エウカリスティアの典礼を中心としています。町や村（barangays）での保護聖人の祝日はたくさんのミサをもって、また食べ物とお祭り騒ぎにあふれた宴会をもって祝われます。結婚、葬儀、そしてそれらの記念日は、通常、聖なるミサで執り行われます。実際のところ、フィリピンの家庭と共同体の行事は、感謝の祭儀による恩恵に浴さなければ完了しません。カトリック信者のグループは、通常、それが社会的なものであれ使徒的活動を目指すものであれ、彼らの集会を聖なるミサで始め、また締めくくります。ミサは、フィリピン社会において、おそらく最も親しみのある宗教的行為となっています(10)。

第二バチカン公会議の典礼刷新はフィリピンの人々がエウカリスティアを祝うにあたって数段の進歩をもたらしました。ミサの式文は多くの島々に散在する地方の言語の中でもおもだった言語に翻訳されています。信徒の参加は、祭儀における応答や歌唱という行動のみならず、さまざまな典礼の奉仕職を引き受けることで推進されています(11)。

とはいえ、フィリピンでの信仰生活においてのエウカリスティアの関わり方において光と闇とがあることは率直に認めなければなりません。エウカリスティアを祝うにあたっての共同体としてのふさわしい感性とともに、信徒のエウカリスティアの正しい理解のためにはまだまだなさねばならないことが多々あります。何よりも緊急の課題は礼拝と生活の乖離です(12)。

熱烈な期待と結ばれた、謙虚で喜びに満ちた主への感謝という特別の雰囲気が、この大会を特徴づけることでしょう。それは、フィリピンの人々がエウカリスティアのうちにおられるイエス・キリストを、世界のいのちのため、国のいのちのためのイエス・キリストの御からだと御血という賜物を祝うことに特別の意味を与えることになるでしょう。しかし、それはまたフィリピンのカトリック信者にエウカリスティアへの信仰を新たに理解し、祝い、その信仰を生きる機会を提供することになるでしょう。

今や、現代世界においてアジアは歴史の新しい中心になろうとしています。そのような状況に於いて第 51 回国際聖体大会が開催されることは、愛と交わりと宣教の教会としてのこの地の特別で独自の召命が、輝かしい形で明らかになる機会となるでしょう。さまざまな次元において、アジアの教会が自分の使命を果たすとすれば、この地はさまざまなアジアの文化と宗教、そして諸民族との真の対話へとキリスト教信仰を導く真正なインカルチュレーションを通して受肉の神秘が実現され続ける肥沃な大地となるはずなのです。

二 エウカリスティア——キリストのあがないのみわざの実現

A 「神秘…あなたがたの内におられるキリスト、栄光の希望」(コロサイ 1・24—29)

コロサイの人々がキリスト教信仰を彼らの文化と彼らの信念とに「順応させて」しまっていると述べた後、キリストはあがないの力の充満を有しておられると、パウロは力を込めて主張しました(1・19)。世界の中にあるすべてのものはキリストのために造られました。実に、この手紙の最初の章から、パウロは「すべて」、そして「あらゆるもの」という言葉を繰り返し繰り返しキリストにあてはめています(13)。

このパウロの重要な教えは、[第二]バチカン[公会議]の『典礼憲章』によって全く明瞭に反響されています。そこで、旧約の民の間で行なわれた神の偉大なみわざは、人類をあがない、神に栄光を帰すために、キリストが成就されなければならなかったみわざを準備するにすぎなかったと主張して

います(14)。キリストの受難、死と復活という過越の秘義は救いの中心的な要因であるべきはずのものでした。それは「死をもってわたしたちの死を打ち砕き、復活をもってわたしたちにいのちをお与えにな」(15)るものでした。ご自分の死と復活という神秘をもって、まさしく、キリストはわたしたちの栄光の希望とされました。十字架上の最期の瞬間に、息を吐くことでキリストが譲渡して下さった聖霊は(ヨハネ 19・30 参照)、「このうえない秘跡である全教会」(16)を産み出して下さいました。こうして、キリストが御父から遣わされたように、キリストもまた、ご自分のあがないのわざを宣言し続けるために弟子たちの共同体、教会を遣わされたのです(17)。

B 宣言された神秘——すべてのものがキリストを受け容れるでしょう

この神秘は絶えることなく宣言され続けなければなりません。すべてのものがキリストを受け容れ、すべてのものがキリストのみ前にあるようになるためです(コロサイ 1・28 参照)。パウロは自分自身を希望の福音の奉仕者と考えています。それは、神のみことばの成就、すなわちかつては隠されていたが今や明らかにされた神秘をもたらすために天の下のすべての被造物に宣言することを意味しています(コロサイ 1・23、25-26)。それを行うためにキリストがご自分の使徒たちを遣わされた宣教をパウロは自ら担いました。その務めとは「彼らが造られたすべてのものに福音をのべ伝えつつ、神の御子はその死と復活によってわれわれをサタンへの支配と死から解放し、御父の国に移して下さいましたことを告げ知らせる」(18)ことです。

しかしながら、福音は言葉よってのべ伝えられるだけでなく、典礼的な生活全体を包み込む犠牲と諸秘跡とを用いてのべ伝えられなければなりません。ここで、聖霊の力によって、男性も女性もキリストの過越の秘義へと投げられるのです。使徒たちの教えを聞くために、そして主の晩餐の食事にあずかるために、定期的にもに集まることで、彼らは主が来られるまで主の死を告げ知らせるのです。教会は、過越の秘義を祝うため、つまり「聖書全体にわたり [キリスト] に関して書かれているすべてのこと」(ルカ 24・27)を読み、そこにおいて「主の死の勝利と凱旋とが現前される」(19)エウカリスティアを祝うために、絶えず集うことで、交わりと一致の秘跡へと絶えず構築されていくのです。

C エウカリスティア——わたしたちの間に現存されるキリスト

これほど偉大なみわざを教会が成し遂げるために、「キリストはつねにご自分の教会とともにおられ、とく典礼行為のうちにおられる」(20)のです。エウカリスティアにおいて、キリストは民をご自分との交わりへと、相互の友好へと絶えず招くために現存しておられます。奉仕者のペルソナのうちに、ともに集まっている人々のうちに、みことばの宣言のうちに、パンとぶどう酒というエウカリスティアの形色のうちに、キリストは結び合わせ、ゆるし、教え、和解させ、わたしたちのあがないのためにご自身をささげ、それゆえ、いのちを与え続けておられます。ご自分のからだと血というエウカリスティアの犠牲(いけにえ)を制定されたのはまさしくこのためなのです。つまり、十字架上の犠牲(いけにえ)において頂点に至る救いの計画を具体化し実現するため、救いをもたらすご自分の死と復活の生きた記念となるためでした。

- (1) 『ミサ以外のときの聖体拝領と聖体礼拝』(1973),n.112
- (2) 第二バチカン公会議『典礼憲章』2 参照
- (3) 『典礼憲章』10。『教会憲章』11 参照

- (4) 教皇ヨハネ・パウロ二世、*In Portu Principis, ad episcopos Consilii episcopalis Latino-Americani dodales* (9 marzo 1983), n.3, AAS 75, par.1, p.778. 参照
- (5) 教皇ベネディクト十六世「第13回通常世界代表司教会議」開催のミサの中での講話（2012年10月7日）
- (6) 前掲書
- (7) このアジアにおけるフィリピンの教会の特別な宣教への使命は、1970年の司牧的訪問において教皇パウロ六世によって、1995年のマニラにおけるワールド・ユース・デーにおいて教皇ヨハネ・パウロ二世によって言及されている。
- (8) スペイン王カルロ五世のために、ホルトガル人フェルディナンド・マゼランの指揮のもとでスペインの五艘のガレリー船での航海の日記を書き記したイタリアの貴族アントニオ・ピガフェッタの報告による。*Relazione del primo viaggio al globo terraqueo*, Milano 1800.
- (9) CBCP, フィリピンの霊性に関する *Landas ng Pagpapakabanal* の司牧書簡(2000), n.62. 参照, カトリック教育とカテキズムに関する司教委員会『フィリピンのカトリック信者のためのカテキズム』(1997), n/1669
- (10) *Landos ng Pagpapakabanal*, n.62。『フィリピンのカトリック信者のためのカテキズム』 n.1669
- (11) 『フィリピンのカトリック信者のためのカテキズム』 n.1670
- (12) *Acts and Decrees of the Second Plenary Council of Philippines* (1990), n.103. 参照
- (13) とくにコロサイの信徒への手紙 1・15—20 を参照
- (14) 『典礼憲章』5 参照
- (15) 復活の第一叙唱
- (16) 復活徹夜祭の第七朗読後の祈願から。『典礼憲章』5 参照
- (17) 『典礼憲章』6 参照
- (18) 前掲箇所
- (19) 『典礼憲章』6。トリエント公会議第13総会『聖なるエウカリスティアに関する教令』c.5からの引用(Denzinger, 1644)
- (20) 『典礼憲章』7

三 エウカリスティア——教会の宣教の源泉と頂点

A 愛の秘跡、一致のしるし、慈愛の絆(21)としてのエウカリスティア

1 エウカリスティアにおけるキリストの現存

その生涯、説教、そして何よりもその過越の秘義を通してキリストが成し遂げられたことは、その教会のうちに、とくに教会の典礼祭儀において現存し続けています。キリストのうちに目に見えるものとなったものは、教会へと、とくに教会の諸秘跡の内へと引き継がれたのです(22)。聖霊の力を通して、キリストはご自分のいのちをもってわたしたちを豊かにし続けておられ、キリストご自身と一つに結ばれて、わたしたちは、感覚に感知しうるしるしを用いて、[御父に]よみされる供え物を御父におささげすることができるのです。

したがって、エウカリスティアは、ご自身を全面的に賜物とすることで、キリストがご自分の教会にお与えになったものを永久的に具体化するものなのです(23)。それはキリストの愛の秘跡となりました。この愛のために、死に、しかも十字架の死にご自身を渡されたのでした(フィリピ 2・8 参照)。それは一致のしるしとなりました。その一致のために、「父よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください」(ヨハネ 17・21)とキリストは死の前夜に祈られたのです。それは慈愛の絆となりました。その慈愛はご自分を新しい掟として弟子たちにお与えになったことで、弟子たちにキリストが求められたものです(ヨハネ 13・34 参照)。それは、キリストがご自分の弟子たちに、ご自分の「記念として」行うようにお求めになることのすべてなのです。愛の秘跡、一致のしるし、慈愛の絆。これこそがキリストがそうあるべきものとして意図されたエウカリスティアなのです。

2 聖霊の変容させる力

エウカリスティアがキリストの愛の秘跡、一致の効果的なしるし、慈愛の絆となるためには、パンとぶどう酒の上に聖霊が呼び求められます。それによってそれらはキリストの御からだと御血になります(聖別のエピクレシス)。祭儀の少し後で、同じ聖霊が集会の上に呼び求められます。それによって集まった人々が「キリストのうちに一つのからだ、一つの霊となるためです(交わりのエピクレシス)」。

この秘跡はまことに偉大なものです。聖霊の働きによって、大地の実り、人間の手のわざはいのちを与えるパン、霊的な飲み物になるようにと変容させられます。同じ聖霊の働きによって、キリストの御からだと御血とを食べて飲む人々はキリストの一つのからだへと変容されるのです。そして、彼らは自分たちの家族、職場、社会、そして世界を変容させるために遣わされます。エウカリスティアは集まった共同体を「いのちと慈愛と真理の交わり」へと変容させます。「すべての人のあがないの道具として用いられ、世の光、地の塩」となるためです(24)。なぜなら、エウカリスティアにおいて、「御父がみ心を行わせるために遣わしたかた(ヨハネ 5・36—38、6・38—40、7・16—18 参照)、わたしたちをご自身へと引き寄せ、ご自身のいのちと使命にあずからせ(25)るからです。

3 変容され、変容するために遣わされる

彼らは拝領したもの(キリストの御からだ)になるように召し出されます(26)。エウカリスティアは、その制定からして、宣教という内的な次元を備えています。なぜなら、最後の晩餐で、キリストはパンとぶどう酒の杯を手にして、いのちを与えるパンと救いの杯となさっただけではないからです。キリストはご自分の弟子たちの足をお洗いになり、互いにそうするようにお命じにもなったのです(ヨ

ハネ 13・14 参照)。謙虚に愛を込めた奉仕において、互いの足を洗うということは、奉仕と宣教というキリストの全生涯の鏡となるはずのものなのです。そのみことばと御からだにおける主との出会いによって奉仕と慈愛の民へと変容された信じる者たちは、自分たちの共同体を生き、いのちを与える友愛の集い (fellowship) へと変容させるように遣わされます。場所と人々とを愛と奉仕の共同体へと変容させるとき、エウカリスティアはその本質と目的とを実現するのです。

B エウカリスティアと宣教

この同じ流れに沿って、エマオへ向かう弟子たちが (ルカ 24・30—32 参照)、[復活されたキリスト] との自分たちの喜びを兄弟たち皆と分かち合うために急いで出かけようとの熱い思いを感じたのは、彼らが復活されたキリストから聞いたことばによって、「パンを裂いてくださったときに」[イエス] だと分かったことで、自分たちの中で心が燃え立ったと感じた後のことでした(27)。エウカリスティアでの交わり (聖体拝領) において「裂いて、分け与えられたパン」にあずかっているながら、キリスト者の個々人ならびに共同体が、世のいのちのためのパンとなるために自分自身を分かち与えるという召命に対して無関心に留まり続けることはできません。この理由で、「エウカリスティアの犠牲を祝うことは、教会共同体が世界の歴史の中で遂行することができる最も効果的な宣教活動なのです」(28)。エウカリスティアの祭儀のあらゆる部分が、交わり (聖体拝領) と宣教との間の切り離しえない結びつきを明らかにしています。まさしくこれによって教会は一致のしるしと道具の双方としてその姿を現すのです (『教会憲章』1 参照)。どのようにして宣教がその中に本質的に組み込まれているか、エウカリスティアの祭儀のいくつかの部分を見るのも有益なことでしょう。

1 開祭

「会衆が集まると…」(29)。さまざまな場所、環境、状況からやって来た、わたしたちは開祭の儀式の諸要素によって、礼拝の集会へと形作られていきます(30)。神の呼びかけに応じてともに集まることが既に、それによってわたしたちが神の契約の民となる、エウカリスティアの創造的な力の第一の活動です。「主はみなさんとともに」、あるいはこれに類似する司祭の挨拶は、わたしたちが今や正式に神を礼拝する集会、主が住んでおられる場であることの荘厳な宣言です。「主はみなさんとともに」という挨拶はまた同時に、信仰宣言でもあります。つまり、キリスト、復活された主、聖霊を派遣する方が、聖なるミサの祭儀にあたって集会のうちに真に現存される [、という信仰宣言なのです]。この同じ言葉は、その胎内に「インマヌエル——わたしたちとともにおられる神」を宿すように選ばれたことを祝された御母に告げた天使の挨拶の一部になっています (ルカ 1・28)。

復活された主キリストが、聖なるミサにあたって派遣される聖霊は、神がわたしたちのために行われた偉大な恩恵に満ちたみわざを思い起こすことができるようにしてくださる方です。こうして、感謝と賛美に満ちたわたしたちの心をもって、祈りと賛美において、わたしたちの心と声を高く挙げるよう、同じこの聖霊によってわたしたちは力づけられるのです。聖霊降臨の日のように、集会を教会として一つに結び合わせ、神のことばに力を授け、パンとぶどう酒をキリストの御からだと御血の秘跡へと聖別し、聖なる交わり (聖体拝領) を通してわたしたちをキリストへと変容してください。

したがって、挨拶の言葉は非常に励ましに満ちたものなのです。それは、わたしたちの集会が復活したキリストと、その方が遣わしてくださる聖霊の現存という恩恵に浴したものであることをわたしたちに保証してくれるのです。このエウカリスティアの集会の中で、キリストは司祭のペルソナにおいてわたしたちと出会い、わたしたちがお互いのペルソナのうちにご自分と出会うことを望んでおられます。聖書が朗読されるとき、[復活されたキリスト] がわたしたちに語りかけてくださいます。こ

の方が、パンとぶどう酒という聖なるしるしのもとにご自身をわたしたちに与えてくださいます。主と出会う礼拝する共同体となるために、いくつかの儀式と祈り——共同の歌、共同の行動、共同の姿勢と動作、共同の祈り、そして沈黙のための共同の間合いさえも——によってわたしたちは助けられています。

開祭の儀式のさまざまな要素は、集まった人々の間に一致を作り上げ、神のことばにふさわしく耳を傾けるよう、またふさわしくエウカリスティアを祝うように彼らを整えることを意図しています。[それはまた集まった人々を]一致の道具、ことばを告げ知らせる者、世のいのちのために裂かれ分け与えられたパンを告げ知らせる者として派遣することを常に目指すものなのです。開祭の儀式は、選ばれ、呼び出され、エクレスシア、司祭的な民へと形作られる運動の端緒を構成するものです。この民を神は「暗闇の中から驚くべき光の中へと招き入れてくださった方の力ある業を、広く伝えるため」(一ペトロ 2・9) に派遣されるでしょう。

2 ことばの典礼

こうして、開祭の儀式によって準備が整うと、信者たちはみことばの宣言を聞くこととなります(31)。神とその民は、「救いの驚くべきわざがのべ伝えられ、神との契約が求めていることがたえず繰り返され」(32)る対話へと入っていきます。神は語り、応答を期待しておられます。宣言、観想、解説、そしてみことばとの一体化と進むダイナミックな流れは、集まった共同体が「みことばを聞くだけでなく、みことばを行う」(ヤコブ 1・22) ように、神の啓示を受け容れる者であるだけでなく、告げ知らせる者に仕立て上げることを意図しています(33)。なぜなら、神のことばは人間存在を照らし、それを聞いた人々を自分自身の内面を見つめるとともに世界を見つめ直すよう促し、正義と和解と平和の実現を目指して世界に関わるようにする抵抗し難い衝動を発動させる力を持っているからです(34)。この点に関して助けとなるものとして、説教者を通して神がその民のもとへと至ることを求め、人間の言葉を通して神の力が発現されるよう準備された説教が期待されます。自分の民(小教区の信徒)を真に知り、良い交流ができていく司牧者によって語られる「説教は本当に、強烈で喜びをもった聖霊の体験や、励ましとなるみことばとの出会い、刷新と成長のたえざる源泉になりえるのです」(35)。

神のみことばをのべ伝える原動力となるだけでなく、信じる者に聞き、理解する力をもたらす聖霊は、それを彼ら自身の生活のうちに実現させます。洗礼と堅信によって聖霊を受けているのですから、信者たちは自分たちの生き方を、自分たちが典礼において祝うことと一致させるように呼ばれているのです。自分たちの生き方によるあかしによって、彼らは、「そのことばが早く広まり、あがめられ、その名が諸国民の中でほめたたえられるようになる」(36)のために、自分たちが聞いたのと同じみことばを運ぶ者となるように派遣されるのです。実際のところ、エウカリスティアのうちで主との出会いにおいてわたしたちが受ける永遠のいのちのことばはあらゆる人に向けられたものなのです。

3 贈り物の奉納

貧しい人々を優先する愛。第二バチカン公会議のミサに関する刷新は、集会がエウカリスティアの犠牲(いけにえ)のためのパンとぶどう酒を奉納することを含む古代からの慣習を復興しました(37)。このような慣習を証言する最後の記録は、七世紀のローマの式次第でした(38)。その記録は、司式者は奉納されたもののうちから一塊のパンを選び、拝領するに十分なだけの量のぶどう酒を取り分け、残りは貧しい人々に配るための祭器卓に置かれたことを伝えています(39)。数世紀にわたって抜け落ちてしまっていた、この慣習が第二バチカン公会議の[典礼]刷新によって復興されたのは、単に信徒の行動的参加を表す格好のものとして加えられただけではなく、教会の貧しい人々に対する特別の

関心を示す、初代教会の素晴らしい慣習に賛同したためでもありました。

聖木曜日の主の晩餐の夕べのミサにおけるエウカリスティアの制定の記念は、パンとぶどう酒とともに、貧しい人々に贈られる物を携えた信徒による奉納の行列の場が指定されています(40)。この行為に伴って歌うよう指定されている歌は、この贈り物を準備することの意義を高らかに歌い上げます。「ウビ・カリタス・エスト・ヴェラ・デウス・イビ・エスト」(愛のあるところ、そこに神はおられる)。その制定を記念する、この夕べのエウカリスティアは、すべてのエウカリスティアの祭儀がこれを目指していることを示す善い範例です。これは、貧しい人々と恵まれない人々を助けるために派遣されることが、エウカリスティアの典礼の核心にあることをわたしたちに教えてくれます。貧しい人、困窮の中にある人へのわたしたちの関心と援助とが真正なものになればなるほど、エウカリスティアは愛の秘跡としてますます明らかに提示されることとなります。エウカリスティアと貧しい人々を配慮するという教会の使命(派遣)との緊密な結びつきは、聖ヨハネ・クリズストモの珠玉の言葉のうちに簡潔に表現されています。彼は問いかけます、「あなたがたはキリストの御からだを尊びたいのですか」と。「それなら自分の身を覆う物を何一つ持たない貧しい人々である、肢体[主の御からだ]をなおざりにしてはなりません。教会の内におられる[主]を絹の布でもって尊んでおきながら、戸外で寒さと裸で震えておられる[主]をなおざりにしてはなりません。…貧しい人々のうちにあつて飢えで死に瀕しておられるときに、黄金の容器が所狭しと並べられている祭壇から、いったい何をキリストは得られるというのでしょうか」(41)。

創造への関心。 ミサに関する第二バチカン公会議の刷新は、祭壇に供え物を置く行動に、ユダヤの食卓の祈りに基づいて形成された祈りを加えました。「神よ、あなたは万物の造り主、ここに供えるパン(ぶどう酒)はあなたからいただいたもの、大地の恵み、労働の実り、わたしたちのいのちの糧となるものです」。この祈りは、世界の創造に対する、またいのちと友好のシンボルであり、エウカリスティアのなかで世界と集会のただ中でキリストの生きた、いのちを与えるキリストの現存の手段となるであろう、パンとぶどう酒の生産における人間の共働に対する神への賛美を表現しています。

しかし、この祈りは預言者としての宣教への派遣の構成要素となります。礼拝は自然界の資源と環境に対して無関心であることはできません。「万物の造り主である神」を賛美することは、わたしたちを支える大地と、神の被造界のために神に感謝することです。世界は、わたしたちが望むままに利用し、所詮は消費消耗すべき未加工の素材ではありません。それは、その品位にまさしくふさわしい形で、神のすべての子どもたちが生きるためのものなのです。「万物の造り主である神」を賛美することは、地球とその資源、無責任に開発された自然界の反乱の犠牲となった人々を擁護するために、人間の心と手の貪欲に対して預言者としての声を上げることを含んでいます。

4 エウカリスティアの祈り(奉献文)

キリストの御からだの形成——パンと集会。 エウカリスティアの典礼の二つの特別な瞬間に、はっきりとした形で聖霊が呼び求められます。聖別のエピクレシスにあたって、「主イエス・キリストの御からだと御血になりますように」(第三奉献文)と、聖霊はパンとぶどう酒の供え物の上に呼び求められます。交わりのエピクレシスにあたって、キリストの御からだと御血にあずかることによって、「集まった人々が」「その[キリストの]聖霊に満たされて、キリストのうちにあつて一つのからだ、一つの心となりますように」(第三奉献文)と、聖霊は集会の上に呼び求められます。エウカリスティアの神秘のキリスト論的、教会論的な視点がこれほどはっきりと表現されている箇所はほかにどこにもありません。つまり、「キリストの御からだ」へと絶えず築き上げられていくために、教会はエウカリ

スティアを祝うのです。それにあずかる人々が「キリストの御からだ」へと形成されるために、パンとぶどう酒は「キリストの御からだ」へとならなければならないのです。こうして、エウカリスティアの神秘を通して、世界のためにいのちをお渡しになったキリストの御からだとしての歴史へと入っていくのです。

早くも、一世紀の後半から、教会がエウカリスティアの式文という宝庫の中に保存してきた祈りのうちにこのことが表現されているのが見いだされます。「このパンが山々の上にまき散らされていたのが集められて一つになるように、あなたの教会が地の果てからあなたの御国へと集められますように」(42)。初代教会にとって、エウカリスティアを祝うことで決定的に重要なことは、それが彼らを互いに集める根拠となっているということです。彼らに救いが訪れるのは、互いに集められたものであること(エクレスシア)においてである、というのが彼らの信仰の確信でした。自分たちを「キリストの一つの御からだ」と認めることで、健康な者は病気の者の痛みと苦しみを敏感に感じ取り、彼らの必要に応えるよう駆り立てられたのでした。エウカリスティアは、分裂と苦痛に関する無感動に異議を申し立てる「キリストの一つの御からだ」へと集められた集会が形成されることで、世界に正義をもたらすものとして教会を派遣するのです。

エウカリスティアの祭儀から去るにあたって、キリスト教信者の一人ひとり、さらに言えば教会全体が、損なわれることのないキリストの御からだを保持しつつ、無関心と不和によって病んでしまったときには健康へと回復させるという使命を帯びて送り出されるのです。

5 聖体拝領(コムニオ)

パンを裂くこと。最後の晩餐でイエスはパンを取り、それを裂きました。裂かれたその一片を、「これはあなたがたのために与えられるわたしのからだである」と仰せになりながら、ご自分の愛する弟子たちにお与えになりました。エウカリスティアにおいて、司祭はこのキリストと同じ行為をします。司祭は、わたしたちのためにそのからだを「裂かれた」キリストの愛のしるしとして、パンを裂きます。エウカリスティアの祭儀の中で、この行為が行われるたびごとに、わたしたちへのご自分の愛を貫き通したキリストの苦痛に満ちた死を思い起こします。裂かれたパンを受けるわたしたちは、キリストが死なれたのは、わたしたちを生きるものとするためであったことを思い起こします。エウカリスティアを祝うとき、わたしたちは「キリストの奉献(犠牲)がすべての人のためのものであることをますます自覚しなければなりません。こうして聖体(エウカリスティア)は、キリストを信じるすべての人が、他の人々のために『裂かれたパン』となり、より公正で兄弟愛に満ちた世界を作ろうと努めるよう駆り立てます」(43)。キリストはあらゆる時代を通じて世界と人類にいのちをお与えになることを望んでおられます。この方の記念として、わたしたちはこれ(すなわち、裂くこと、分け与えること、愛すること)を行うのです。わたしたち一人ひとりがイエスとともに、まさしく世界のいのちのために裂かれたパンとなるように呼び出されているのです。

アジアの諸国の人々に向けて、聖ヨハネ・パウロ二世教皇は、数世紀を通じてアジアの無数の人々によって示された自己譲渡と犠牲——つまり殉教——に対する驚嘆に値する力を称賛しました。そして、現代のアジアのキリスト者が、状況が求めるのであれば、同じことを行う用意をしておくようにと喚起しています(44)。アジアの国土は、非常に残虐な死に勇敢に立ち向かい信仰の真理を雄弁に証明し、忌まわしい迫害のただ中であって同じ信仰の美しさを示した男女を教会と世界に提供してきました。聖パウロ三木とその同志たち、聖ロレンソ・ルイスとその同志たち、聖アンデレ・ジュン・ラクとその同志たち、聖アンデレ・キム・テゴンとその同志たち、聖アウグスチノ・チャオ・ロンと一〇九名の同志たち、聖ペドロ・カルソド——全員アジア人——は、裂かれたことで全体となるエウカ

リスティアの信仰に蝕知できる形を与えたのです。

交わりの食事。 エウカリスティアにおいて、エウカリスティアの集会が他の人々の糧となることのうちにキリストの御からだが現実のものとなります。エウカリスティアの行為は、その存在を食べ尽くされる、すなわち飢えた世界を養うために裂かれ与え尽くされるからだへとします。エウカリスティアは、世界のための糧となるものとして自分自身を差し出すものとしてキリスト信者を派遣します。エウカリスティアにおいて、食べ尽くされるという行為は逆転され、ケノーシスの、あるいは自己無化の行為となります。キリストの御からだの一部であるということは、キリストとともに裂かれた人間存在の状況にまで降ること、「僕（しもべ）の身分」をとって自分を無とすることなのです（フィリピ 2・7）。

アジア諸国の人々の特徴である自己犠牲の偉大な能力は、それをともにするという覚悟と結び合わされない限り、たいした意味を持たないでしょう。ある人の自己無化は、それによって他の人が満たされる時にのみ意味あるものとなります。キリストはご自身を無とされました。その結果、わたしたちはキリストのいのちによって満たされ、それもそのいのちを豊かに受けることになるのです（ヨハネ 10・10 参照）。聖ヨハネ・パウロ二世教皇は、とくに今のこの時代に、世界のこの地域（アジア）において、これ（自己無化）への参加がなされなければならない特別の地域であると語っています(45)。難民、亡命者、移住民、外国からの労働者たちが受け入れられた諸国で置かれている状況——友人の欠如、文化的な疎外、言葉の障害、経済的な不安定——は、疲労と苦難のただ中であって安らぎと憩いを見いだす温かい家庭的な場を求めています。どこの国、どこの地域においても、キリスト者の共同体が、彼らにとってそのような温かい歓迎と憩いの家庭的な場となりますように。エウカリスティアの宴は、わたしたちの共同体において欠乏のうちにある人が一人もいなくなるようにと、[自分を分かち与える] ようにと、わたしたちを派遣するのです。

6 閉祭——「イテ・ミサ・エスト」

閉祭はエウカリスティアの祭儀を締めくくり、会衆を派遣します。閉祭のこの派遣という特徴について論じる人々の中には、「ミサ」と「ミッション（派遣・使命）」という言葉の双方がラテン語の「ミッテレ（派遣する）」という動詞から派生したとする人々がいます。この儀式が人々を「神を賛美し、たたえながら、自分の仕事に戻る。[…解散される]」（46）ものとして描写されていることも意義深いことです。

既に、開祭の導入の部分について説明したときに、集会を形成する人々は集められ、神のことばを聞き、エウカリスティアの食事をふさわしく拝領するために整えられること、そしてそれが常に、一致の道具、よい知らせを告げる者、世界のいのちのために裂かれ分け与えられるパンとして派遣されることを目指していることが語られました。今、閉祭において、[集まった人々に]「行きなさい、[集会は] 派遣される」と語られます。エマオに向かった弟子たちの物語におけると同様に、宣言されたキリストのことばにおける、そしてパンを裂くことにおける復活されたキリストとの出会いは、熱く燃え、熱心に主を告げ知らせるものへと集会を変容させる内的な力を持っているのです。彼らが体験した友としての交わり、彼らが聞いたみことば、彼らがともに分かち合ったエウカリスティアの食事は、今や、凝縮された証言のかたちで、世界へと持ち運ばれるものとなるのです。証言は、わたしたちの行いとことばと存在のあり方を通して、わたしたちが証言する人物——わたしたちを集め、わたしたちに語り、いのちを与えるパンとしてご自分のからだを与えてくださった主イエス・キリスト——ご自身を臨在させることを意味しています(47)。キリストを証言することは、職場で、家庭で、世

界のあらゆる所でわたしたちが会う人々が、キリストの慰めに満ちたことば、その癒し、キリストのもたらす一致、いのちを与える臨在を体験できるようにすることを意味します。なぜなら、わたしたちがそこに存在するからです(47)。

ミサの終わりの閉祭では、福音を広めるために働き、キリスト教の価値観で社会を満たすという勧めと役務とをもってわたしたちを派遣します(48)。ここに、祝われたばかりのミサから世界の中のキリスト者としてのわたしたちの宣教・使命との間の途絶えることのない継続性があります(49)。聖体拝領後の祈願は、真正なエウカリスティアへの参加の裏りである、この途絶えることのない継続性を表現しています。「秘跡の恵みを日々の生活で生かすことができますように」(50)。この継続性によって、教会は常に交わりと宣教の秘義として自らを明らかにします。教会の存在と宣教・使命の中心に位置するエウカリスティアは突出した形で交わりは派遣の秘跡だからです。

エウカリスティアの祭儀、そしてそのあらゆる部分は、教会の宣教の役務がその本性に染み込んだものであることを示しています。「宣教のうちにある共同体・宣教に向く共同体」(a community-in-mission) であることは教会のアイデンティティの一部なのです。教会はこのアイデンティティを、キリストはその過越の秘義によって世を救われたことを儀礼的に宣言するものとしての礼拝の生活において、また人類と世界の出来事のうちにあって救いをもたらすキリストの臨在を確かなものとする奉仕の生活において実現しているのです。

- (21) アウグスティヌス『ヨハネ福音書講解』四・13、『典礼憲章』47に引用されている。
- (22) 教皇レオー一世『説教』七四・2。Ed.A.Chavasse(CCL 138A) Turnhout 1973, p.457: “Quod itaque Redemptoris nostri conspicuum fuit in sacramento transivit…” 参照
- (23) 『典礼憲章』47 参照
- (24) 『教会憲章』9
- (25) 教皇ベネディクト十六世『主のことば』n.91
- (26) アウグスティヌス『説教』二七二・13–14 参照。「もしあなたがたがキリストの体と肢体であるなら、主の食卓の上にはあなたがたの秘義が置かれています。あなたがたの秘義を受け取りなさい。あなたがたがなるところの方に『アーメン』と答えなさい。そしてこう答えることで同意を表明しなさい」。
- (27) 教皇ヨハネ・パウロ二世「一般謁見」(2000年6月21日)、使徒的書簡『主の日』(1998年7月5日) 45 参照
- (28) 前掲書
- (29) 『ローマ・ミサ典礼書』ミサ式次第(第三規範版) n.1
- (30) R.Cabié, The Order of Mass of Paul VI, in The Church at Prayer: The Eucharist, Collegeville 1986, 193 参照
- (31) 『朗読聖書の諸言』(1981年6月21日) 6、7 参照
- (32) 教皇フランシスコ『福音の喜び』(2013年9月24日) 137。教皇パウロ六世『福音宣教』22
- (33) 『朗読聖書の諸言』6、『主のことば』91
- (34) 『主のことば』99
- (35) 『福音の喜び』135 参照
- (36) 『朗読聖書の諸言』7
- (37) ユングマン『ミサールム・ソレムニア、ローマ・ミサの発生的説明』全二巻(1948) 参照。ユ

ングマンはこの古代からの慣習をエイレナイオス（イレネオ）、テルトゥリアヌス、ローマのヒッポリトス、そしてキプリアヌスにまでさかのぼるものとしている。集会によってパンとぶどう酒の献げ物のごく一部がエウカリスティアの犠牲のために取り分けられた。残りは後で貧しい人々に配られた。

- (38) Ordo Romanus I, in M.Andrieu (ed.) Les Ordines Romani du Haut Moyen Age II. Les textes (ordines I—XIII),(Spicilegium Sacrum Lovaniense. Etudes et documemts 23),n.78-84, p.93-94.
- (39) ユングマン、前掲書、2,6-8 参照
- (40) 赤字による注記には次のようにある。「信者は奉献の心を表すために、[感謝の祭儀のパンとぶどう酒を奉納し、また、教会の維持や] 貧しい人を助けるための奉納を行うようすすめられる」
- (41) 『マタイ福音書講話』 50,3-4,PG58,508-509
- (42) 『十二使徒の教訓』 九・4 (佐竹明訳: 講談社文芸文庫『使徒教父文書』 p.34)
- (43) 教皇ベネディクト十六世『愛の秘跡』 88
- (44) 教皇ヨハネ・パウロ二世『アジアにおける教会』 49 参照
- (45) 前掲書 34
- (46) 『ローマ・ミサ典礼書の総則』 90
- (47) 教皇ベネディクト十六世『愛の秘跡』 85 参照
- (48) 教皇ヨハネ・パウロ二世『主よ、一緒にお泊りください』 24 参照
- (49) 教皇ベネディクト十六世『愛の秘跡』 51 参照
- (50) 年間第二十五主日の拝領祈願（典礼委員会訳）。ラテン語原文は“ut redemptionis effectum et mysteriis capiamus et moribus”（あがないの実りを秘跡と日々の振る舞いによって得ることができますように）

四 アジアにおける教会の宣教——対話における宣教

A 宣教の特別優れた方法としての対話

アジアという具体的な状況の中で、その起源とキリストとの関係によって常に、どこにおいても「宣教の内にある共同体・宣教に向く共同体」(a community-in-mission)である教会(51)は、全く特別な意味で、対話の精神をもってその遣わされた宣教活動に携わるように呼ばれています。宣教のための特別の手段としてのそのような対話は、それによって諸国の人々が彼ら自身の中において絶えることのない交わりと平和な共存を保つために、多民族、多言語、他宗教、多文化というアジアの現実によって要請されるだけではありません。むしろ、このような形での宣教活動はその根を、それによって御父が、聖霊の力において、御子を通して、ご自分との愛に満ちた救いの対話へと人類を招き入れてくださった、三位一体の神のあがないのみわざ(オイコノミア)と交わりへの召し出しのうちに有しています(52)。対話は、「人となり、わたしたち人間のいのちを分かち合われ、その救いのメッセージを伝えるために人間の言語を語られた」(53)ご自分の御子のうちに、御子を通して、わたしたちのあがないのための計画を実現された神の方法なのです。

したがって、教会が自分の師であり主である方(ヨハネ 13・14 参照)から命じられた宣教・使命を実現するには、あがないと交わりのために神が率先して取られた本質的な特徴を示すものである、すべての男女との対話による以外に、他の方法はないのです(54)。教会が現代世界において自分の果たすべき宣教の方法に関する第二バチカン公会議の見解は、同様に、さまざまな民族、言語、宗教、文化、そして社会的政治的構造との対話を通しての関与を反映しています(55)。アジアにおいて、これが一つの特別な方法であることは真実です。アジアにおいて教会は、「主であり救い主であるイエス・キリストへの教会の信仰を分かち合う人々」との、また「すべての人の心にある宗教的なあこがれに基づく、他のあらゆる宗教的伝統の信者」との対話に取り組まなければなりません(56)。

既に、最初の総集会において、アジアの司教たちは、アジアにおける宣教という領域で、この対話はいかなる形態を取るべきかについてははっきりとした認識を示していました。それは「生きたさまざまな伝統、諸文化、諸宗教との、簡単に言えば、[アジア諸国の]人々のあらゆる生きる現実との途切れることのない、謙虚で、愛のこもった対話」でなければなりません。「[教会]はその人々のただ中にその根を深く下ろし、その人々の歴史と生活を嬉々として自分のものとしなければなりません」(57)。これは、三十年前から、「三様の対話」として言及されたものではありませんが(58)、今日まで有効なものであり続けています。アジアの人々の諸文化との対話、その人々の諸宗教との対話、彼らの内の非常に多くの人々が巻き込まれている貧困、無力感、苦難、強いられた犠牲という、いのちの状況との対話[の三つです](59)。

B 宣教における対話の諸要素

この三様の対話は、「人々の日常生活の具体的な現実において彼らに近づくための、『言葉』と『行動』においてキリストをあかしするもの」(60)としてとられなければなりません。言葉をもってキリストをあかしすること、すなわち救いの福音を明確にのべ伝えるにあたって、物語や他の説話形式を用いることは多大な効果が約束されています(61)。アジアの多くの人々は「物語やたとえ話、そしてシンボルを使った、人の心を呼び覚ますような教授法(an evocative pedagogy)」(62)にうまく反応することができるからです。二〇〇六年九月にタイのチェンマイで開催された第一回アジア宣教大会は、イエスご自身が神の国の深さを啓示するたとえ話と視覚的な描写を用いておられること、[イエスご自身が]肉となった神の愛であることを慈愛と感謝をこめて思い起こしています(62)。物語は、信

仰の最も深い神秘さえも理解させ、視点と価値観を変えさせ、共同体を形成し、友好関係を樹立させる特別の力を持っているのです。

他方、行動におけるキリストのあかしは、貧しい人、疎外された人を完全な成長・進歩と解放へと導くために、正義と平和と人間の尊厳のために具体的な奉仕活動によって、この三様の対話に取り組むことを意味しています。双方（言葉と行動）の取り組みはいのちに関わる対話へと、また救いのよい知らせを告げ知らせる人々の状況への深く入り込むこと、その人々の文化に対する感性、すべての人に対する敬意と受容力、絶えず共感をもって聴く力、人間関係の進展、学びながらの実践という結果をもたらします。さらに宣教におけるこの対話は、自然環境と資源の濫用から破壊的な災害が生ずるとき、あるいは地球の資材が平等に配分されないとき、多大な苦難に苛まれている人々のために被造界の完全な保全を探し求める保護の霊性をも求めます。

したがって、宣教における対話は、絶えずイエスご自身とその〔宣教〕方法に立ち返ること、聖霊に対する敬意、祈りの中の識別、自己のケノースを常に探究すること、祈りは神の臨在、共苦共感（コンパッション）、恵みと聖性のいのちへと他の人々を導く能力によって構成される福音化の霊性を求めます。

C 宣言と対話について

対話はそれ自体で終わるものではありません。分け与えること、そして受けることを目指しています。対話は、他者を尊敬し、他者が与えられたもの（賜物）であることを認めるように向かわせます。対話は、神が善い方であることを、その生き方のうちに、その生き方を通して表現していることを他の人々から聞くことができるようにします(64)。「対話の種々の段階をとおして、対話する者たちは、情報を与えたり受けたりすること、説明を述べたり聞いたりすること、互いに質問することが大いに必要であることを感じる」(65)ようになります。対話の相手のキリスト者としては、対話において、自分の信仰を提供し、対話によって造られた対話の相手の期待に応じて、自分たちの内にある希望（一ペトロ 3・15）を説明する用意ができていなければなりません。対話は常に、キリストに対する信仰と希望を宣言し、分かち合うことを目指しています。イエス・キリスト、そしてその救いをもたらす死と復活をのべ伝えることなしに、真の福音化はありえません(66)。人は自分の持っていないものを分け与えることはできません。この対話に誠実に取り組むためには、キリスト者はキリストに対する、またその過越の秘義に対する信仰を深め、自分たちの態度を清め、自分たちの言語を明白にし、自分たちの礼拝をますます真正なものにしなければなりません(67)。

このような対話と宣言のすべての段階が愛を動機とするものでなければなりません。キリスト者はキリストに対する自分の信仰を宣言し、分かち合わなければなりません。主の命令に対する従順によるだけでなく、愛によるものでもあるからです。他方、他の宗教を信奉する人々も、同様に、自分たちの信仰の富を分かち合うように期待されているのです。キリスト者の愛の同じ精神が、他者と分かち合うことで豊かになるように開かれていることを必要とするからです。この点に関して、アジアの司教たちは、時宜を得た重要な声明を提示しています。「対話は、自分の大切にしているものを括弧に入れてしまっておいたり、簡単に妥協を図ったりして、それを放棄することを求めるものではありません。逆に、深い、実りのある対話のためには、対話の当事者の双方が自分の信仰をしっかりと保守していなければなりません」(68)。すべての対話は、相互性を意味しており、恐れと闘志を取り除こうとするのです(69)。

D 対話の源泉であり頂点であるエウカリスティア

教会のいのちにおいて、エウカリスティアはこの対話の源泉であると同時に頂点ともなっています。エウカリスティアの祭儀に参加することで、わたしたちは三位一体の神とのいのちの交わりへと入ります。歴史の中で開始され、今や、聖霊の力によって典礼という秘義において恒久化された、いのちと救いの対話へと組み入れられるからです。[感謝の]祭儀のさまざまな要素は、わたしたちの救いのためにささげられたキリストのいのちのリズムにわたしたちを分け、あずかるものとするために展開されるこの対話において、わたしたちのからだ、わたしたちの感覚、わたしたちの意識、わたしたちの感情を巻き込みます。礼拝のために集まり集会を形成することで、ご自分の契約の民とされるための御父の召し出しにわたしたちは応えます。宣言されたみことばを聴き、それを吸収する（それと一体化する）ことで、それによって御父が癒し、形成し、ご自分のいのちと愛をもって、とくにエウカリスティアという背景において、秘跡による交わりへと導くために、カテキズムの諸形態を凌駕する説教の助けを得て、わたしたちは対話へと入っていきます(70)。

キリストの御からだを食べること、その御血を飲むことという全く独特な方法で、わたしたちは三位一体の神との対話に入っていきます。わたしたちのエピクレシスの祈りに応えて、御父はご自分の御子を通して聖霊をパンとぶどう酒の上に遣わしてください。それらがわたしたちの主イエス・キリストの御からだと御血になるためです。エウカリスティアの集会から出かけて行くことで、とくに最も小さな人、最後の人、見捨てられた人に対する愛のこもった奉仕という形で、この三位一体の神のいのちと救いの対話を継続し拡張するために、わたしたちは派遣されるのです(71)。

それゆえ、儀式の行動の中でのダイナミックな動き（集まること—ことば—食事—派遣）は、エウカリスティアがイエス・キリストの生涯と奉仕の全体とはいえ、その苦難、死、そして復活と最終的な栄光という過越の秘義において頂点に至る[キリストの生涯と奉仕の全体]のうちにその場をもった対話の生きた記念であることをわたしたちに実感させるのです。それは御父への従順の行為（上昇の運動）と弱い罪人に対する共苦共感[コンパッション]（下降の運動）の双方である、また礼拝（上昇の運動）と奉仕（下降の運動）の双方の犠牲[自己奉獻]の対話だったので(72)。

教会のあり方が対話のあり方を特徴とするアジアにおいては、「わたしたちとの神の対話、神へのわたしたちの応答、愛の対話という独特の体験として」(73)エウカリスティアが輝きを放っています。エウカリスティアにおいて、キリストはあらゆる人を、愛と癒しのそのことばを通して、同じ神を自分たちの「父」と呼ぶ人々の間に愛に満ちた関係を深める食事を通して、ご自分のいのちを分け与えてくださる友愛の食卓に招いてくださるといふことは、親の助言と家族での食事によって強められ、損なわれることなく保たれている家族の緊密な結びつきを誇りとしている文化の中にいる人々にとって大変意味深いものであります(74)。あらゆる飢えを満たすパン、あらゆる渇きを鎮め、喜びをもたらす飲み物としてキリストがご自身を提供してくださるといふことは、その日々の生活が基本的な必需品の不足に特徴づけられている[アジアという]国土にいる多くの人々の心を温かくするでしょう(75)。その地の諸文化、諸宗教、貧しい人々、そして若者と絶えず対話しつつ宣教するアジアの地方教会にとってエウカリスティアは常に指し示し続けなければならないものです。その中から醸し出される神と人間との対話は教会の宣教活動全体の種子であり目指すもの（ヴィジョン）でもあるからです。

(51) 『典礼憲章』6 参照

(52) 教皇ヨハネ・パウロ二世『アジアにおける教会』29 参照

- (53) 前掲箇所
- (54) 『対話と宣言—諸宗教間の対話とイエス・キリストの福音の宣言をめぐる若干の考察と指針—』(1991年5月19日) 参照
- (55) 『現代世界憲章』とくに23と42、『教会の宣教活動に関する教令』とくに5と10 参照
- (56) 『アジアにおける教会』29 参照
- (57) Federation of Asian Bishops' Conference (FABC), *Evangelization in Modern Day Asia. First FABC Plenary Assembly(1974)*, in *For All the Peoples of Asia 1. FABC Documents from 1970—1991*, ed. F.J.Eilers, Quezon City 1997, n.14
- (58) 最初に、この三様の対話が話題になったのは、1974年4月22—26日に台北で開催された第一回 FABC 総集会であった。 *For all the Peoples of Asia*, vol.1. Manila : IMP Publications, 1984, pp.25—41
- (59) FABC, 7th Plenary Assembly(2000), in *For All the Peoples of Asia III*, n.4. 参照
- (60) Bishops' Institute for Missionary Apostolate I(Baguio), n.5
- (61) 『アジアにおける教会』20
- (62) 前掲箇所。 Special Assembly for Asia of Synod of Bishops, *Relation post disceptationem*, 15 参照
- (64) *Faith Encounters in Social Action IV* (Kuala Lumpur), 12. 参照
- (65) 『対話と宣言』 82
- (66) 『福音の喜び』110。『アジアにおける教会』2と19、教皇パウロ六世『福音宣教』22 参照
- (67) 『対話と宣言』82
- (68) Bishops' Institute for Interreligious Affairs IV/7 (Tagaytay) ,n.10
- (69) 『対話と宣言』83
- (70) 『福音の喜び』137。『主の日』41 参照
- (71) 『アジアにおける教会』24 参照
- (72) FABC, *Living the Eucharist in Asia. Final Document of the IX FABC Plenary Assembly (19—16bAugust 2009)*.参照
- (73) 前掲箇所
- (74) Catholic Bishops' Conference of the Philippines, *Pastoral Letter Landas ng Pagpapakabanal, on Filipino Spirituality(2000)*, 71—74 参照
- (75) 前掲書 75—76

五 諸国の人々と文化との対話を通しての宣教

アジアでの教会の宣教は、幅広く多様な文化との対話を通して行われなければなりません。アジアは地球上で最も広大な大陸を占め、世界人口のほぼ三分の二を占めているだけでなく、多くの文化、言語、信条、そして伝統がモザイク状にひしめてもいます。アジアの司教たちによって発言された声明を心に留めて、教皇フランシスコは、アジアの諸文化にもたらされつつある多種多様な課題を改めて指摘しました。それらの内には、マスメディアのさまざまな形態に過激に描写されたことに起因する新しい行動様式や、結婚の神聖さと家族関係の安定を含めた伝統的な価値観がマスメディアと娯楽産業の有害な諸要素によって蝕まれつつあることが挙げられます(78)。このことは、この [アジアという] 国土においてキリスト教が少数派の宗教に留まり続けている事実に加えて、「あまりにも西洋的にすぎる」あるいは「植民地支配の一手段」とみなされる原因となっています(79)。それゆえ、必然的に、アジアにおけるキリスト教の宣教は、一方では福音ならびにキリスト教信仰とアジアの人々の文化との間での対話、他方ではその望ましい結果としてインカルチュレーションされた信仰と福音化された文化との間の対話を含むものでなければなりません(80)。

A インカルチュレーションと宣教

神学的かつ司牧的な緊急課題。 アジアにおいてインカルチュレーションに取り組む意図には、アジアにおける真正なキリスト教共同体の未来像が動機づけとなっています。つまり、アジアのキリスト者が自分たちの方法で考え、祈り、生活し、自分たち自身のキリスト体験を他の人々に伝えるというものです(81)。未来像に向かったインカルチュレーションは単なる優先課題ではありません。むしろ、それは神学的かつ司牧的な緊急課題なのです。受肉の秘義と過越の秘義とは、地方の諸教会がその生活、祭儀、証言、宣教の形態において、周囲の諸文化のうちに深く浸透する基盤であると同時に範例でもあります(82)。神の御子が人間、一人のユダヤ人となられ、こうして歴史、文化、伝統、ユダヤの民の宗教の一部となられました。教会もまた、自分が存在する場所のあらゆる民族と文化とに受肉しなければなりません。「キリストご自身が受肉によって生活をともにした人々の、ある社会的・文化的状況にきずなによって結ばれたのと同じ動機で」(83)、教会は自分が植え付けられた所のあらゆる人々の一部とならなければなりません。教会は自分を受け入れてくれた国の人々の生活に同化されなければなりません。教会はその人々にとって余所者であり続けることはできません。アジアの内にある教会としてだけでなくアジアの教会として、フィリピンの内にある教会としてだけでなくフィリピンの教会として認められ得るまでに、教会は自分を受肉させなければなりません。

このような受肉の姿勢は、教会の普遍性を危機にさらすどころか、むしろそのような普遍性を促進させることになるでしょう。教会の信仰を通して、またご自分のあがないのわざを通して、キリストはご自身を種々さまざまな民族と文化の内に受肉し続けておられます。キリストは普遍的な救い主なのです。なぜなら、キリストはご自身をあらゆる国々の人々の具体的な現実の一部とし、その人々のあがないをもたらすことができになるからです。教会もまた真に普遍的なものです。あらゆる地方の教会の具体的な現実の内に自分を受肉させることができるからです。教会が自らを受肉させるとき、教会はその地方の人々と自分自身との双方を豊かなものとするのです。受肉は、信仰を受け容れる人々と、自らを受肉させる教会とを互いに豊かにし合わせるのです。

アジアの諸文化との対話において。 その国の人々の文化的な素材を用いて福音を宣言し、礼拝を執り行うことによって、教会は、神によって開始され、[その国の人々] が極めて具体的な状況において

[神]のみことばを口にするときには頂点に達する救いの対話を時間と空間の中で継承するのです(84)。インカルチュレーションは、教会の信仰、礼拝、そして生き方をその土地の人々を惹きつけ、受け容れやすいものとするための単なる方便ではありません。アジアの諸文化との対話に入っていくということは、キリストの使信と生涯とを、わたしたちの国の人々の心と生活の中に真に受肉させ、その結果、彼らがアジア独自の方法で、つまり真にアジアの地の教会として生きることができるようになることを意味しています。その国の民としての日々の生活の一部となっている、生きた象徴(シンボル)、表象(イメージ)、素材、物語を用いてその人々に福音がのべ伝えられます。その人々はみことばを受け容れ、それを自分たちの生き方、価値観、態度、渴望の原理・本源とします。自分たちの文化の一部である表現が用いられ、自分たちが大切にしてきた価値観が反映されている方法で自分たちの信仰体験を理解し、祭儀を執り行うよう助けを得ることになります。結局のところ、キリスト教の礼拝の言語、儀式、象徴(シンボル)は常にそれらの起源をある文化の内に有しており、常にその文化から意味を引き出すことになるのです。典礼の歴史は、数世紀にわたって教会が接してきた種々さまざまな国の人々から取り入れた文化的な諸要素の統合を明らかにしています(85)。個々のキリスト教共同体の礼拝は、その地方の人々の文化的表現に基づかざるをえないのです。このようにしてこそ、人々はこの固有の時間と空間においてキリストの御からだとなるのです。

この対話によって、福音はインカルチュレーションし[文化の中に受け容れられ]、人々の文化は福音化されます。これによってまた、「今、ここで」固有の国の人々の生活の中にキリストの御からだは具体化し現実となった真の地方教会として確立されるのです。それはそれ自体としては独特のものではありますが、同様に自分の独自性を備えた他の諸共同体との交わりの内にあるのです。他の諸共同体とともに、一つの信仰を表明し、一つの[聖]霊にあずかっています。他の諸共同体とともにひとつの秘跡的ないのち、同じエウカリスティアにあずかりますが、その教会に固有な方法でそれを祝います。要するに、真の地方教会は、自分が祝う礼拝と福音を最も効果的にインカルチュレーションしているのです。

アジアにおける教会は、地方の文化が正統なキリスト教の靈性に貢献することができるという点に関してもっと率直に認めなければなりません。身体一魂一霊の統一における全人格を巻き込む豊かに発展した祈り、深く内面的で内面的な祈り、徳徳と克己の伝統、古くから東アジアに伝わる観想の技術、単純化された祈りの形態と他の民間に普及している信仰の表現、純朴な民衆にも馴染みやすい信心によって人々の心と精神はいともたやすく日常生活の中で神へと向かうのです。聖霊は、アジアの諸教会が、そのすべてが祈りと礼拝の伝統的な方法の中でも最良のものを、わたしたちのキリスト教の遺産という宝庫のうちに統合するように導いてくださっています。これは教会へのアジアからの祈りの賜物です。

B アジアの諸文化との教会の対話における民間信仰

アジアの具体的な領域での諸文化との教会の対話に関する論述は、[アジアの]諸国の人々の間に広く浸透している多くの形態の民間信仰を考察することなしでは完了しないでしょう。すべての文化と宗教とを信奉し実践している人々は、それらの存在と実践を福音の宣教活動にあたって、とくに信仰と礼拝のインカルチュレーションの仕事にあたって知らずにはならない礼拝、宗教的な祝祭、民間信仰に惹かれています(86)。そのような民衆的な信心は「質朴で貧しい人々のみが知りうる、ある神への渇きを示していて」(87)、それらは「告白が問われるときは、人々に自らをささげて、熱心に徳の頂点に至らせる力を与えます」(88)。

アジアにおける宣教に関連して、民間信仰とその種々さまざまな形態を重視するということは、ま

ず第一に、福音を告げ知らせ、人々を礼拝に引き寄せるにあたって民間信仰の持つ力を認めることを意味します。第二に、アジアにおける教会は、民間信仰の典礼的儀礼的な要素のあるものを人々の礼拝の中に組み入れることを許すよう挑戦されているということです。そうすることによって、人々の生活の極めて具体的な現実において神がその人々と出会っているものとして、それを体験し、そこで我が家にいるように感じるができるでしょう。換言すれば、典礼と民間信仰は相互を豊かにする交換にまで進まなければならないということです。それによって「渴望は祈りのうちに表現され、今日のわたしたちの国々に見いだされる霊の賜物 [カリスマ] は明瞭さと賢明さとをもって伝達されるでしょう」。また、「民間の信仰心は、その象徴的で豊かな表現をもって、その創造的なダイナミックな力を典礼と分かち合うことができるでしょう」(89)。

教会の宣教における民間信仰。 スペインの宣教師たちが比較的容易にキリスト教信仰をフィリピンの人々に受け容れさせ、非常に大勢の信者を擁することになったのは、サント・ニーニョ [幼子イエス] と祝福された御母への信心を導入したことでした。民間の信仰心は常にフィリピン人の間のカトリシズムの要塞であり続けました。宗教的な信心業に対するフィリピンの人々の強い愛着のおかげで、自分たちのもとにキリスト教をもたらしたスペインの修道士たちに対して反逆したときでさえ、彼らはキリスト教信仰を捨てなかったのです。国家の教育制度がアメリカのプロテスタントの教師たちによって統制されたときにも、フィリピンの人々はローマ・カトリシズムから逸れることはありませんでした。カトリック信者の中での原理主義的なセクトの改宗活動も全く成功を収めることはありませんでした。それらのセクトは彼らの信心業に対する共感を抱いていなかったからです。フィリピンにおけるキリスト教信仰の歴史は常に彼らの宗教的な信心業と関わってきました。「フィリピンのカトリック信者が知っているカトリックの教理と倫理観の多くは諸秘跡と信心業の実践を通して学んだものである」(90)というのが現実です。さらに、民間に普及したある種の信心業を実践するのは、貧しい人への愛のわざを実践し、そのための組織を立ち上げる機会となって来ました。

このため、また他の多くのこれに類した宣教活動の歴史のために、教会は民間信仰に対して共感の姿勢をとるように奨励します。「この現実を理解するために、裁きではなく愛を求めるよい牧者の目で見たいと思います。愛から生まれる自然な感情だけが、キリストの民、なかでも貧しい人々の信心の中にある神のみ心にかなう生活に気づかせてくれます」(91)。それは奨励され、強化されなければなりません。なぜなら、低く評価してはならない福音化の力を有しているからです。低く評価することで聖霊の働きを認め損ねることになるのです(92)。

実際に、この共感の姿勢は、その共同体にとって、民間の信仰心の積年の伝統の(典礼的、儀礼的)側面と [キリスト教の] 典礼との統合を意味します。その結果として、人々は典礼のうちにあって何かしら心休まる体験をすることができるとともに、民間の信仰心は福音を真正に媒介するものとなるのです。この場合、典礼と文化との間の健全な対話は、人間的な顔かたちを典礼に授け、民間の信仰心により堅固な土台を提供することになります。

C 諸文化との教会の対話におけるエウカリスティア

アジアには非常に多種多様な文化、価値観、伝統が育まれています。それらの中にも共通する文化的要素があります。緊密な家族の結びつき、親に対する尊敬の念、家族での食事、神の(聖なる文書に書き留められた)ことばの神聖視、もてなし、奉仕の形で実践される「上位にある者の任務」(leadership)と自己犠牲の覚悟などです。アジアという具体的な状況において、エウカリスティアは、その多くの国々の人々に差し伸ばされる宣教活動の強力な出発点であると同時に、同じ宣教活動

が憧れ望む目標でもあります。アジアの人々は、エウカリスティアの祭儀のうちに、価値あるものとして自分たちが共通して有しているものを見いだすのに困難を覚えることはないでしょう。

食事としてのエウカリスティアは、アジアの多くの人々によって高く評価される家族関係と「もてなし」とを極めて明瞭に示すものです。ご自分のみことばとご自分の独り子の御からだをもって養うために、神がご自分の子どもたちをともにお集めになる食事、自分たちへの無限の愛に対して、子どもたちが自分たちの父に感謝し賛美することのできる食事、そこで[子どもたちは]自分たちの必要としているものを信頼をこめて表明することができ、自分の兄弟姉妹と、そして自分たちの広大な家族を構成する他の多くの人々との交わりの中にある家庭的な食事としてエウカリスティアが提示されれば豊かな実りをもたらすでしょう。

アジアの多くの人々がどれほど「上位にある者の任務」(leadership)に敏感であるかを考えれば、自己犠牲としてのエウカリスティアは彼らにとって非常に意義深いものとなるでしょう。例えば、この「上位にある者の任務」は両親によって子どもたちに対して、兄や姉によって弟や妹に、村長によって村の住民たちに、祭りの主催者によって来客たちに対して発揮されます。この「上位にある者の任務」は要求されれば自己を犠牲にする覚悟を伴った奉仕の形で発揮されます。フィリピンの貧しい家庭において、自分たちが食べる前に子どもたちが食べることは、両親にとって極めて普通のことです。たとえ食卓に十分な食料が並んでいなくても、子どもたちの誰一人として飢えることはないことは確かです。すべての子どもを学校に行かせるだけの財源がない家庭では、兄や姉が弟や妹に学校に行く機会を与えるのは極めて普通のことなのです。

エウカリスティアはアジアの多くの人々にとって大きな意味を持つでしょう。なぜなら、それは心から大切にしている文化的に価値あるものを表現しているからです。食事と自己犠牲として執り行われるエウカリスティアは、自己犠牲の死と言ってよい神の御子の犠牲を通しての神からの救いの提供、わたしたち皆を神の家族とするための神からの招待、わたしたちを生かすために裂かれ、分け与えられた御からだ、いのちを与える神のみことばによって、わたしたち皆を豊かにしようとする神の果てしない願いというよい知らせをのべ伝える最高の方法なのです。エウカリスティアはまた、同じ富、意味、そしていのちを他者と分かち合うことを目指す、宣教の精神と自覚とを活気づけるための最高の方法でもあるのです。

(78) 『福音の喜び』 62

(79) A.J.Chupungco, *Mission and Inculturation: East Asia and the Pacific*, in *The Oxford History of Christian Worship*, ed. G. Wainwright-K.B.Westerfield Tucker, Oxford: Oxford University Press, 2006, p.665.

(80) *Consultation on Evangelization and Inculturation*, in *For All the Peoples of Asia III. FABC Documents from 1997—2001*, ed. E.-J. Quezon City: Claretian Publications, 2002,p.218 参照

(81) *Conclusions of Asian Colloquium on Ministries in the Church*(Hong Kong, 3 March 1977), in *For All the Peoples of Asia I. FABC Documents from 1970—1991*, ed. G.B.Rosales-C.G.Arevalo, Quezon City: Claretian Publications, 1997, p.70 参照

(82) *Church Issues in Asia in the context of Evangelization, Dialogue and Proclamation. Conclusions of the Theological Consultations*(Thailand,3—10 November 1991), in *For All the Peoples of Asia II. FABC Documents from 1992—1996*, ed.F.-J.Eilers, Quezon City: Claretian Publications, 1997, p.201

- (83) 『教会の宣教活動に関する教令』 10
- (84) Letter of Participants of the First Bishops Institute for Missionary Apostolate, Baguio City, Philippines, 27 July 1978, in For All the Peoples of Asia I. FABC Documents from 1970—1991, ed. G.B.Rosales-C.G.Arevalo, Quezon City: Claretian Publications, 1997, p.94 参照。[訳者註：イタリア語版では「時の充満において御父が人々の歴史の中でご自分の御言葉を告げられたときに」]
- (85) Chupungco,op.cit.,662 参照
- (86) 『アジアにおける教会』 22 参照
- (87) 『福音宣教』 48
- (88) 前掲箇所
- (89) Latin American Episcopal Conferences, The Puebla Document(1979), n.465
- (90) Catholic Bishops' Conference of the Philippines, New National Catechetical Directory for the Philippines, Manila 2007, n.308
- (91) 『福音の喜び』 125
- (92) 前掲箇所

六 諸宗教ならびに宗教的諸伝統との対話における宣教

多文化であることと並んで、アジアは諸宗教ならびに宗教的な諸文化が整然と立ち並んでいる所でもあります。アジアは世界宗教——ユダヤ教、キリスト教、イスラム教、ヒンズー教——、さらには仏教、道教、儒教、ゾロアスター教、ジャイナ教、シーク教、神道といった他の多くの霊的な伝統の揺籃の地であるとともに、それぞれの多数の信徒を抱えた地でもあります(93)。そこにはまた、さまざまな度合いにおいて形式的にも儀礼的にも宗教的な教えの形をとった、他の多くの宗教的あるいは部族的な伝統があります。アジアにおける教会は、これらの諸宗教ならびに宗教的諸伝統との対話に取り組まなければなりません。

A いのちと心の対話

神のみことばの種(94)。アジアの他宗教という現実との対話において、教会は、そこには何らかの形で神の民に貢献するものがあることを認めて、他の諸宗教と信仰に対して深い尊敬と敬意の態度をとっています(95)。教会はキリスト教信仰に深く下ろした自分の根を強く保つよう努めつつ、相互に豊かにし合い、敬意をもって出会うために、他の諸宗教の生き方、教え、信条、儀式をよりよく理解するよう努めています。要するに、これらの偉大な宗教的諸伝統は、世界における神の**ことばの臨在**と、**聖霊の継続的な創造の働き**を表現するものである、**霊的、倫理的、人間的な価値**を秘めているのです。わたしたちの先祖の非常に深い宗教的体験が、彼らの心の気高い憧れとともに、そこには収められている一方、現在の信奉者たちはそこから意味と手引きと力とを引き出しているのです。

救いのための受肉の計画後の範例。[アジアの]大地の他の宗教的諸文化に対する肯定的で積極的な姿勢は救いのための受肉の計画とも合致します。それによってキリストは、ご自分のあがないをもたらす愛と力の圏内にそれらを取り込むために、人間に関わるすべて(罪を除いて)を抱き取られたのでした(96)。キリストが神の秘義を啓示され、救いをもたらすご自分の宣教を成就されたのはイスラエルの宗教的伝統の中でのことでした。キリストの使徒たちと教会の最初期の外国宣教者たちは、ギリシア・ローマ世界の多様な宗教的諸文化に直面して、同じ対話の姿勢をとったのでした。

エキュメニカルな宣教の精神において。「すべての人を教会の懐に招き入れるために役立つものがあれば、それをことごとく強化する」(97)ことを願いつつ、他の宗教的諸伝統に対して開かれた姿勢を取り、「その中に隠されているみことばの種を喜びと敬意をもって見いだす」(98)ように、教会はすべてのキリスト者を駆り立てています。さらにまた、それらが福音とキリスト教信仰にとって相容れられないものでない限り、創造主の栄光を讃美するために、他の宗教的諸伝統の、文化的な形態、教え、行動、工芸、建築、旋律、言語、そして知識を用いるように奨励さえしています(99)。

この開かれた分かち合いの姿勢は、キリスト者が自分たちの同胞のアジアの人々の心と魂、そして最も純粋な表現を発見することができるようにし、それゆえに正しく認識できるようにします。自分たちのキリスト教信仰を不安定な大地の上に置くのとは違って、他の宗教的諸文化と諸伝統との対話は、他の信仰を信奉している人々の間で、自分たち自身のキリスト教信仰を生き、かつ表現する真正な方法を見いだすようキリスト者たちを活気づけるでしょう。それは、それまで見たこともなかったような自分たち自身の信仰の多くの宝をキリスト者たちが発見する助けとなるでしょう。キリストに対する自分たちの信仰が他の宗教的諸伝統によってどれほど豊かなものになりうるのか、キリスト教信仰の慣行に吸収される以前に、それらの宗教的諸伝統のうちの何が浄化され、癒され、完成されな

ければならないか、この対話は神のことばの光のもとに識別する助けとなるでしょう。

B あかしを優先すること

アジアの他宗教を考慮に入れば、福音宣教活動は、まず第一に、単純率直な方法で御父の愛をあかしすることによって存立しなければならないでしょう(100)。このことは、キリスト者ならびにキリスト者の共同体が、キリストのように生きることによって、キリストによって啓示された唯一の神に対する信仰へと、自分たちの非キリスト者である兄弟姉妹を引き寄せるように召し出されているということの意味しています。しばしば、このことは、貧困と困苦のうちにある人々の世話をし、その必要とするものを提供することで、人々に寄り添い、連帯するという形で行なわれてきました。これは、キリストが福音で教えておられるように、そのような人々が自分たちが受け入れられていると感じることで、制度や組織以上に、人々の要求に応えるものとなるでしょう。あかしされる神は、「おそらく多くの人々にとって、神とは、彼らが名を知らずに拝む神か、あるいは偶像のむなしさを経験して、彼らが心の中でひそかに呼び求めている『知られざる神』でありましょう。しかし、人間にとって創造主とは、名もない、遠い所に存在する力ではなく、父である、という事実を明らかにすることは、りっぱに福音をのべ伝えることとなります。……わたしたちは神において互いに兄弟、姉妹であります」(101)。これほど多くの多様性の中にあって、それもしばしばさまざまな種類の葛藤の中にあって、教会は自らのいのちによって、いのちを与える一致と調和への神の召命をあかしするように、またそのような一致の目に見えるしるし並びに道具となるように召し出されているのです(102)。そのキリスト教信仰と委託を授けられた、信徒〔非聖職者である信者〕は、世界——家族、政治、教育、文化、社会環境——における彼らの存在と行動のゆえに、この対話において特有の役割を果たします。パン種のように、彼らは人間の営為と歴史をあらゆる善意の人々が希望をすえている終末的な充溢へと導く使命を受けているのです。

C 一致とキリスト教の希望

他の宗教的諸文化との敬意と愛に満ちた対話は、常に、自分の最高の宝を分かち合うという精神で、キリストをのべ伝えることを目指しています。アジアの多宗教という具体的な状況において、このような対話は福音宣教の理想的なあり方です。謙虚さと相互援助のうちに、わたしたちは自分たちの非キリスト者の兄弟姉妹と、被造界全体のための神の計画であるキリストの満ち満ちた〔富〕を、その完全さと偉大で驚嘆すべき多様性のうちに、分かち合おうと努めているのです。すべての人が分かち持っている神を、そして兄弟的な絆を求める共通した思いは常に、ある日、人類家族全体が父であるひとりの神のもとに一つに集まるようにという希望の源泉なのです。

D 他の宗教的諸文化との教会の対話におけるエウカリスティア

家族、和解、いのちを与え合うこと、連帯、もてなし、奉仕、自然への愛、沈黙と観想はまさしく宗教的な信念に関わりなく、アジアの国々の人々が共有する貴重な価値を持つものに属するものです。わたしたちのエウカリスティアの祭儀において、これらの価値あるものは見いだせませし、美しく力強い形で保たれてきました。わたしたちがエウカリスティアにあずかることは、これらの大切に保たれてきた価値あるものに対するわたしたちの渴望をより切実なものとし、わたしたちのアジアの隣人たちのただ中で、それらを実行する具体的な行動へとわたしたちを駆り立てるはずなのです。わたしたちがエウカリスティアにあずかることは、神が夢見ておられるのはわたしたちを皆、神の子どもとしてその一つの家族へと再び集めることであるという確信をわたしたちの内に強め、この確信を対話

と祈りをもつての識別へと移し、この神の夢を屋根の上から倦まず弛まず告げ知らせるように努めさせ、人々の生活の上に重くのしかかる罪の影響を減少させるとともに、神の計画によって本来彼らのものであった尊厳を最高度に享受しうる平和と幸福の到来を指し示す奉仕の効果的な行動へと彼らを駆り立てるはずで

す。他方、エウカリスティアには「[教会の] うちにある人々を日々、主における聖なる神殿、聖霊における神の住まいに築き上げ、キリストの満ちあふれる豊かさに達するまで成長させる」(103)という目的があります。他方、多宗教のアジアにおける教会の具体的な宣教活動において、エウカリスティアは、「キリストをのべ伝えるために、そうして外にある人に対しては、諸国民の中に掲げられたしるしとして教会を示し、散らされた神の子たちがこのしるしのもとに一つに集められ、一つの群れ、一人の牧者となる」(104)ためにキリスト者の決意と力とを驚くほどに強めるのです。

七 貧しい人々との対話における宣教

アジアにおける教会の宣教は、貧しい人々との対話に取り組まなければなりません。それは、[アジアの] 大地が文化の点では豊かであり、その[国々の] 人々は人間のかつ宗教的価値基準では豊かですが、そのうちの非常に大勢の人が貧困、無力、疎外、不当な差別、被害のうちに暮らしているからです。彼らが貧しいのは彼らの国土が自然と資材に乏しいからではなく、尊厳をもって生きていくため、また彼ら自身と家族のための将来を確保するために必要な物資と資源を入手する手段を奪われているからです。抑圧された不公平な社会的、経済的、政治的状况が彼ら自身の祖国の豊かな自然財産を享受することから遠ざけているのです。

A 貧しい人々を優先すること

大勢の人が貧しく、彼らの人間としての尊厳にふさわしい生活を送るために必要な基本的なものにすら事欠いているアジア固有の状況に直面して、アジアにおける教会は貧しい人々の教会となるよう特別な召し出しを受けています。アジアにおける教会は自分の生き方と宣教の最前線に貧しく剥奪され、抑圧された人々を置かなければなりません。諸文化との教会の対話の場合と同様に、貧しい人々との教会の対話も神学的かつ倫理的緊急課題であります。教会が貧しい人々を優先しなければならない第一の理由は、キリストの模範そのものにあります。キリストが貧しい者となられ、「『はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである』(マタイ 25・40)と仰せになって、特別な方法でご自身を貧しい人々と同一視されたのです」(105)。それは誰かを排斥して優先的に愛するよう召し出されているということではなく、貧しい人、剥奪された人、抑圧されている人が教会に第一に注目され、奉仕され、支援される権利を持っていることを明らかにすることです。旧約と新約の両聖書は、貧しい人々が神のみ心において特別な位置を占めていること、少なくとも、[四つの] 福音書が雄弁に証言しているキリストの生涯と宣教活動においてはそうであることを、繰り返し繰り返し証言しています(106)。

B 暗示しているものと結果

アジアの司教たちは、既に何年も前から、アジアにおける教会は、そこに含まれること、またそこから帰結することのすべてを了解した上で、ますます「貧しい人々の教会」にならなければならないと認識してきました(107)。貧しい人々の教会になるとは、まず第一に、アジアにおける神の民の牧者

たちとして立てられた者たちが、貧しい人々の貧しさを共有していると分かるような純朴な生活を送らなければならないことを暗示しています。また、行動における福音の輝かしいしるしである、この純朴な生活によって、貧しい人々は、自分たちの牧者たちとの本物の、心のこもった親近性を感じるでしょうし、支援と指導を求めて、より自由に彼らのもとに駆け寄るでしょう。

教会の貧しい人々への優先的な愛が次に暗示しているものは、教会は貧しい人々が置かれている状況を改善し解消するために実際に介入しなければならないということです。このことは、健康管理、教育、平和の実現という重要な仕事に関わることによって、人間的な生活そのものの向上という奉仕に関わることを意味しています。これは、少数の人に限られたものではなく、あらゆる人に関わる召命なのです。「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」（マルコ 6・37）〔と主は仰せなっています〕(108)。それはまた、すべての人の間に連帯性の機運を盛り上げることを意味しています。〔連帯は〕「共同体の観点から、一部の人による財の独占よりもすべての人の生活を優先する、新たな精神性を必要としています。〔連帯は〕、所有物の社会的役割を知り、財は万人のためにあるという原理が私的所有よりも優先される現実であることを知る者の自然の反応です」(109)。

教会が貧しい人々を優先することについて第三に暗示しているのは、とくに彼らの暮らしを圧迫し続ける対外責務、科学的、経済的、技術的な進歩によって引き起こされた環境破壊といった、経済的かつ文化的なグローバル化の否定的な帰結に対して、預言者としての姿勢を取ることです。「進歩のため」の計画はしばしば、人類に、家族に、そしてとくに貧しい人々に大規模な損傷をもたらすのです。そこには、教会とキリスト者とが留意しなければならない多くの人間的、文化的、倫理・道徳的課題があります。これらの差し迫った事態に関わることは、現代における「宣教活動」の一部なのです。

C 貧しい人々のための召命への応答——彼らのために働き、彼らとともに歩むこと

一九七四年に開催されたアジア司教協議会連合の第一回総集会は、アジアにおける教会（そして地方諸教会）は「ますます『アナウイン』の教会になるために一貫して努力すること」を自分たちの課題としました。「この〔教会〕は慈善事業のような形で貧しい人々のために働くだけでなく、彼らの生活と渴望とを共有し、彼らの絶望と希望とを理解し、彼らがキリスト・イエスのうちに真正な人間性を探し求めるにあたって彼らとともに歩むことで、真に貧しい人々とともに労苦する〔教会〕です」(110)。

アジアの貧しい人々のために働き、ともに歩むために教会が踏み出さねばならない第一歩は、貧しい人々自身と、彼らが暮らしている場と、彼らが苦しんでいる同じ貧しさと同化させることです。彼らは都市の街路に、あるいはスラムの仮設の小屋に散在しているホームレスの家族です。彼らは戦争で破壊された祖国から、自分たちの母国での抑圧的な支配体制から、家族のためにより良い暮らしの機会を求めてきた移住者であり海外から労働者であって、しばしば友人もなく、文化的にはよそ者で、言葉は通じず、経済的基盤もない人々です。彼らは、彼らの文化、肌の色、民族、カースト、経済的状态、あるいは彼らの思考方法のゆえに、しばしば差別されている先住民です。彼らは、家庭内暴力の犠牲者、売春、観光事業、娯楽産業の商品のように売買された女性たちです。彼らは、自分たちの祖国で一度も平安を体験したことのない、あるいは小児性愛や小児労働のようなさまざまな形での耐え難い酷使と暴力の犠牲となった子どもたちです(111)。さらにまた、自分たちの国では教育と収入を得る機会が制限されているため、あるいは全くないために、自分の能力と才能とを発揮することから遠ざけられている人々でもあります。

教会は、慈善的な分配、あるいは台風とか地震の大災害の後の救援物資の配分のように彼らを助け

るために働くだけでなく、彼らの貧困と剥奪を恒久化している諸構造を変革する仕事に彼らを取り込むことで、彼らとともに働かなければなりません。それはまたわたしたちの社会に社会的な正義をもたらすための本当の関わりと努力、神なしのイデオロギーに押しつけられたのではなく、ご自分の民を解放してくださる神のみ旨によって常に真に動機づけられた行為でありうる祈りと識別によって育まれた活動とを必要とします。

D 貧しい人々との教会の対話におけるエウカリスティア

貧しい人々との教会の対話において、エウカリスティアは、貧困の諸原因を無効にする価値観を掲げ、再確認します。エウカリスティアはキリストの自己犠牲の愛をもって、不正の多くの形態の根となっている自己主義と貪欲に立ち向かいます。エウカリスティアは、唯一の神を「わたしたちの父」と呼ぶ一つの家族とするキリストの招きによって、貧しく苦しんでいる人々の痛みを感じることから人々を鈍感にする、無感動と個人主義に疑義を唱えます。エウカリスティアは、奉仕というキリストの率先的行動 (leadership) ——これこそご自分の弟子たちの足を洗われた師であり主である方の [率先的行動] です (ヨハネ 13・13) ——をもって、政治的かつ経済的優位をもって人々に君臨する抑圧的で全体主義的な統率 (leadership) に立ち向かいます。さらにそれらに加えて、エウカリスティアは、他の人々が生きるためにご自身を裂いて分かち与えてくださるキリストの自己譲与をもって、自分の利益と楽しみのために用いることのできる便利な道具として貧しい人々と弱い人々を取り扱う功利主義、消費文化、唯物主義に挑戦します。「感謝の祭儀 (エウカリスティア) がささげられるたびに、十字架につけられた主が、わたしたちのために、また全世界のためにご自分のいのちによってささげたたまものが、秘跡の形で現れ」(112)るからです。わたしたちがエウカリスティアにあずかったことから、わたしたちのすべての兄弟姉妹に対する神の共苦共感 (コンパッション) をあかすためにわたしたちは派遣されるのです(113)。

他方、エウカリスティアにおいて「いのちのパン」(ヨハネ 6・35) としてのイエスにわたしたちは出会います。イエスは、「神の口から出るみことば」(申命記 8・3 参照) と、「天から降ってきたいのちを与えるパン」(ヨハネ 6・51)、聖書のみことばの宣言のうちに聖なる交わり (聖体拝領) のうちに受け取られる「貧しい人々のパン」という双方のあり方で存在されます。イエスは「主の祈り」においてわたしたちが祈り求める「日ごとの糧」なのです。聖体拝領によって、イエスはわたしたちを養うために、ご自身をわたしたちの糧として与えてくださいます。そして今度は、わたしたちが飢えているわたしたちの兄弟姉妹のもとに出かけて行き、共苦共感と愛をもって、慈しみのわざをもって、いのちをささげること、それも余るほどにささげること、彼らを養うためのパン (糧) とならなければなりません。まさしくエウカリスティアを祝うことはそれほどまでに示唆に富んでいるのです。エウカリスティアは教会がアジアにおける自分の宣教を実現するものとしての、貧しい人々へのキリストと教会の優先的選択を表現しているのです(114)。

八 若者との対話における宣教

アジアは若い大陸であると考えられます。その人口の三分の二が青年層であり、それは全世界の青年層の六〇パーセントを占めているからです。それ以上に、これらの青年と子どもたちの大多数が貧しいのです。アジアの若者との対話における宣教は、社会と教会における彼らの重要であり、かつまた微妙な立場のゆえに、教会の司牧的配慮において優先されねばならないことのうちに数えられます。

A 教会の未来と現在

教会にとって、若者は世界の未来であるだけでなく、教会の現在の高価な宝であります(115)。教会は明日の成人としてのみ若者と関わるだけでなく、非常に重要な今日の現実として関わらなければならないと、教会は認識しています。生活のさまざまな領域で率先的行動という手綱を握るものとしての彼らの将来の役割のために、若者を準備させ養成する責務に教会は取り組んでいます。しかしながら、彼らの若い活力、熱意、資質をもって、今現在、変革のダイナミックな担い手であり、それゆえに、社会と教会とにおける希望の源泉でもあるのです。

しかし、若者は社会の多くの破壊的な力に非常に傷つきやすく、しばしば市場開発という構造の犠牲となっています。それ以前にも、今日、若者を取り巻く現実は無数多様です。グローバル化、政治的変革、マスメディアの拡大は、アジアのあらゆる分野で若者たちの生活に根本的な影響を及ぼしています(116)。都市と農村、貧困と富、教育を得た者と教育を得なかった者、仕事を持っている者と持っていない者、組織化されたものと組織化されていないものといったすべての背景にかかわらず、若者は現代文化の波に翻弄されているのです。それゆえ、若者は教会の今日でもあるのです。彼らは教会が現在、司牧的に最優先しなければならない課題の一つなのです。しかし、教会は今からでも彼らを、他者への、とくに同輩の若者たちの間での創造的で生産的な奉仕に取り組ませることができるのです。

B 若者と「良い土壌」となる課題

今日、[アジアの]大地における若者たちが多くの複雑な問題に直面していることを率直に認めたい。アジアの教会は、「社会と教会との未来に対する若者の責任を思い起こし、その責任を担うよう備えられるようにするあらゆる段階で彼らを力づけ支援」(117)しなければなりません。何にもまして「解放を与える喜ばしい秘義であり、確信と勇気をもって、知られ、生きられ、分かち合うものとして福音の真理」の種を彼らに蒔くことによって(118)、彼らにふさわしく適切な司牧的配慮を提供しなければなりません。しかし、彼らが現在生きている世界は、焼けつくような熱気には言及しないまでも、岩とあざみに満ちていますので、若者への司牧的配慮は、神のみことばの種が芽生え、根を下ろし、成長し、百倍にも及ぶ実を結ぶ「良い土壌」(マタイ 13・1—8 参照)となるように若者を支援することも含まれています。

若者への司牧的配慮は彼らの旅路に同伴することを意味するでしょう。彼らの周りで生ずる急激で徹底した変革のため、また人間としての成長段階において、この段階が身体的にも情緒的にも心理的にも、そして精神的にも劇的な変化を遂げ続ける時期でもあることから、その旅路は容易なものではありません。この種の司牧的配慮は、種を蒔く前に、土地をやわらかくし、種を受け容れることができるように準備するようなものです。それはまた、彼らの関心と活力とに影響を及ぼし引き寄せようとし、彼らの内での信仰の初期の成長を妨げかねない、多くの「誘惑」に対して彼らを力づけようとするものでもあります。神のみことばの種が芽を出し、根を下ろし、豊かな実を結ぶ「良い土壌」になるようにするという、司牧的配慮のこの側面は、神のみことばの種を蒔く前に、あるいは種を蒔くと同時に必要とされるものです。

C 若者の養成

アジアにおける教会の教育的宣教。アジアの具体的な現状を特徴づけている大規模な多様性の中にあって、キリスト者としての教育は、若者を他の諸宗教の若者との有意義な対話に備えるものでなけ

ればなりません。正規なものであるか否かはともかく、そのような教育はまず第一に、彼らのキリスト教信仰の基本的な真理と価値観を、そして次に他の諸宗教の基本的な真理と価値観とを彼ら若者たちに教える良い機会となるでしょう。これ以上に注目すべきは、彼らの大多数が貧困のゆえに正規な教育を受けることができないことです。アジアにおける教会は若者へのキリスト教教育、まず第一に信仰を啓発し力づけ、キリストの精神に従った生き方を養い、典礼で祝う秘義に知的に、また行動的に参加するよう導き(119)、使徒的活動への原動力を与えるカテキズム教育のための他の創造的な手段を探さなければなりません(120)。心理的かつ身体的成長のためのさまざまなグループ、若者たちの団体、コミュニケーションの手段も役に立つでしょう。

若者ととともに旅すること。アジアにおける宣教のこのような状況にあつて重要な意味を持つのは、彼ら若者の平和と人生の意味を探求する旅路に、彼ら自身と彼らの愛する人々のために安定した未来を確保する努力に、間違つたイデオロギーの誘惑、一時的な熱狂、悪行、そして彼ら自身の絶望に対して戦うことに同行することです。アジアにおいて、一九八五年に、聖ヨハネ・パウロ二世教皇によって開始されたワールド・ユース・デイの成功は好対照のものとなっています。アジア・ユース・デイ。そこには多種多様なアジアの国々から若者が集まり、ともに祈ること、エウカリスティアを祝うこと、生活体験を共有すること、ともに働くこと、食事をともにすること、歌や踊りをともに楽しむことを通して、共同体となることの強い意義を体験することができるのです。このようなイベントによって、彼らとともに身近に歩むこと、彼らが自分たちの若い活力をもって行うことができることに信頼し、彼らに力を与えることで、若者は教会が自分たちとともにいると実感するようになります。

若者ととともに旅するということは、教会の未来と同様に、現在の教会において彼らが有している重要な役割を再確認することを意味します(121)。それは、若者たちを厄介な存在と見るのではなく、財産とみなすことです。それは彼らに耳を傾け、祈りのうちに寄り添い、導くことで彼らに同伴することを意味します。それは、既に出来上がった答えからではなく、彼らの体験から彼ら自身が学ぶのを助けることです。他の人々によって決定されたことを実行するよう求めるだけでなく、決定への過程に彼ら若者を関わらせることです。このことは必然的に、あらゆる国、司教区、小教区が若者のための教会活動を指導し運営する青少年委員会(a Youth Commission/Committee)を持つよう促します。若者が教会の福音宣教の担い手ならびに共働者と認められるときにのみ、彼ら若者の潜在的な能力は充分に開花するでしょう。

D 第一の担い手ならびに働き手

アジアの諸国の大多数を占めている若者を含めて、若者は教会の司牧的配慮と宣教を受け取る側にあるだけではありません。彼らの多くは既に、教会の種々さまざまな愛と奉仕の使徒的活動、とくに同輩の若者のための〔使徒的活動〕において教会の宣教活動の最前線にいます。彼らの熱意と活力によって、今現在でも、彼らは自分たちに関わる活動を企画し実行することで、行動的なリーダーシップを発揮することができるのです。

今日、若者によって起ち上げられ成長した多くの団体や運動があることをわたしたちは知っています。それらを聖霊の働きとみなすことができるでしょう。聖霊は彼ら若者の期待、深い霊性とより具体的な帰属意識の探究に出会うために、新しい小径を切り開かれます。しかしながら、そこにはそれらの団体が教会の全体的な司牧的活動のうちに具体的に関わる必要があります(122)。

E 若者との教会の対話におけるエウカリスティア

エウカリスティア——愛の対話。今日、教会の宣教は多くの不安と疑問に直面している若者を支えるものとしてエウカリスティアへと向かわせることが含まれています。教会が対話において若者と最もよく関わるができるのはエウカリスティアの集いにおいてのことだからです。そこにおいて、教会は、彼らがそこから自分たちの最も根深い渴望に十分に答えてくれる独特の答えを引き出すことができるキリストの福音を彼らにのべ伝えるのです(123)。ことばと秘跡におけるキリストとの彼らのエウカリスティアによる出会いは、人生の意味と目的に対する彼らの探求に光と手引きが差し伸べられます。エウカリスティアにおいて、イエスは、福音の中で若者に注いだ特別な愛をもって若者を見つめ、御父とのご自分の愛に満ちた関係の中で、また人類と世界とを救うご自分の宣教活動において、ご自分に従うよう彼らを招かれます（マルコ 10・21 参照）。

エウカリスティア——キリスト教価値観の初等学校。彼ら若者を行動的にエウカリスティアに参加させることによって——注意深く耳を傾け、積極的に適切な身体表現、それがふさわしい時には沈黙を守ること、祭儀において特別の奉仕職を果たすことによって——、若者は教会と社会とにおける自分たちの未来と現在の役割のために最高度に養成されるのです。エウカリスティアの対話において、教会が若者と語り合えば合うほど、若者もまた彼らの活力と熱意をもって教会にかかわるようになります(124)。神のみことばとキリストの御からだの食卓を囲んで、教会は、それによって、神のみことばの種が芽を出し、根を下ろし、豊かな実りをもたらす「良い土壌」となる準備ができるための教えと糧とを提供します(125)。エウカリスティアは若者にとって完全な学校です。そこで、関係性と共同体を築き上げる存在の価値、神の創造に対する感謝と責任感、他者のためにいのちと癒しと一切を与える奉仕と自己犠牲を学ぶことができるのです。

コミュニケーションとしてのエウカリスティア。さまざまな社会的なコミュニケーションの手段に若者が惹かれていること、またそれらを使いこなしていることを考えると、教会は、最高に具体的で理想的なコミュニケーションの手段としてエウカリスティアを若者たちに提供することができるでしょう。そこでは友人関係が確立され生まれ、希望と夢と喜び、そして不安までもが共有され、気高い大義と支援とが起動します。エウカリスティアという学校で、若者は、コミュニケーションとは考えと感情とを交換すること以上のものであり、その最も深い次元において愛のうちに自分を与えることを学ぶでしょう(126)。教会は、キリストはエウカリスティアを、神と人との間の最も完全で親密なコミュニケーションの形態」として制定されたこと、それは「人々の間の可能な限りの深い一致」(127)へと導くものであることを若者に語ることから身を退いてはなりません。エウカリスティアは最も深く、変容させるコミュニケーションが実現する場です。呼びかけの祈りに応えて、御父は御子を通して聖霊を遣わしてください。その結果として、パンとぶどう酒、そして集会がキリストの御からだとなるのです。

(93) 『アジアにおける教会』 6

(94) 『教会の宣教活動に関する教令』 11 参照

(95) 『キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言』 2 参照

(96) 『教会の宣教活動に関する教令』 10 参照

(97) 『典礼憲章』 1

- (98) 『教会の宣教活動に関する教令』 11
- (99) 前掲書 22
- (100) 『福音宣教』 26 参照
- (101) 前掲箇所
- (102) 『教会憲章』 1
- (103) 『典礼憲章』 2
- (104) 前掲箇所
- (105) 『アジアにおける教会』 34。『福音の喜び』 186 参照
- (106) 『福音の喜び』 187 参照
- (107) Asian Bishops' Meeting, Message of the Conference (Manila 1970) , in FAPA 1, p.5.参照。
この会合以降、アジアの教会はますます貧しい人々の教会にならなければならないというアジアにおける教会の認識を聖霊が導いたことは極めて明瞭である。
- (108) 『福音の喜び』 188.Congregation for the Doctrine of Faith, Instruction Liberatis Nuntius (6 August 1984) ,11.参照
- (109) 『福音の喜び』 188—189
- (110) FABC, Evangelization in Modern Asia. Statement of the First Plenary Assembly, in For all the Peoples of Asia 1, Documents from 1970—1991 cit.,p.15
- (111) 『アジアにおける教会』 34
- (112) 『愛の秘跡』 88
- (113) 前掲箇所
- (114) 本書の三・B 「エウカリスティアと宣教」、とくに「供え物の準備、エウカリスティアの祈り、聖体拝領」に関する項を参照
- (115) FABC, Youth, hope of Asian Families. Statement of the 4th Asian Youth Day, 30 July—5 August 2006, Hong Kong, in For all the Peoples of Asia 4. Documents from 2002—2006, Quezon City: Claretian Publications 2007, p.167
- (116) FABC, A Renewed Church in Asia: A Mission of Love and Service, in FABC Documents from 1997 to 2001, cit.,p.9—10
- (117) 『アジアにおける教会』 47
- (118) 前掲箇所
- (119) 『典礼憲章』 14
- (120) 『司教の司牧任務に関する教令』 13、14 参照
- (121) FABC, A Renewed Church in Asia: A Mission of Love and Service, cit.,p.10
- (122) 『福音の喜び』 105
- (123) 教皇ヨハネ・パウロ二世『信徒の召命と使命』 46 参照
- (124) 前掲箇所
- (125) 『ローマ・ミサ典礼書の総則』 n.28 参照
- (126) Pastoral Instruction Communio et Progressio on the means of social communication (23 May 1971) , 11 参照
- (127) 前掲箇所

九 教会の宣教における聖母マリアとエウカリスティア

エウカリスティアと教会の宣教についての省察の終わりが近づいた今、エウカリスティアの神秘を具現化しているとともに、宣教する教会(the Church-on-mission)の完全な模範でもある祝福されたおとめマリアに向かいます。

A マリア——宣教する教会の模範であり御母

「アジアのキリスト者は、マリアをキリストの母であると同時に自分自身の母として心から尊敬し、愛しています」(128)。このように、一九九八年のアジアのための特別総集会においてシノドスの教父たちによって作成された言明に、聖ヨハネ・パウロ二世教皇は言及しておられます。一九三七年にマニラで開催された国際聖体大会のための賛歌には、マリアに対して特別の愛を抱いている国民としてフィリピンの人々を表現する「pueblo amante de Maria」という言葉が含まれています。このような賛辞は、自分たち自身の母と愛情込めて呼んでいる、救い主の御母に対して、この地の人々が抱いている特別の愛と尊敬とを確認するものです。この同じ賛辞は、アジアにおける教会の宣教の旅路においてマリアがどれほど重要な役割を担っているかを証言してもいます。マリアは福音の宣教における教会の模範なのです。なぜなら、御子の救いのみわざにおいて、緊密に共働しておられたからです(129)、教会が担ってきた、そしてこれからも担い続ける宣教の旅路を体現しておられるからです。

その訪問においてエリサベトに、御子の誕生において世界の他の人々によい知らせをもたらす以前に、マリアはまず初めに[受胎]告知において、その同じよい知らせを受け取りました。同じように、教会もまた、まず初めに福音宣教されるべきものとして、そして福音宣教するものとして呼び出されたのです(130)。「婦人よ、ご覧なさい。あなたの子です」と仰せになって(ヨハネ 19・26-27)、十字架のもとで、キリストは教会と、その宣教とを御母の配慮に託されました。「マリアは、福音をのべ伝える教会の母です。マリアを抜きにしては、新たな福音宣教の精神を十分に理解することはできません」(131)。

マリア——最初に福音化された方。マリアは、天使ガブリエルによって宣言された「最初の福音」のうちに神のことばを聞きました。マリアの「フィアット」、神からの呼び出しに対するマリアの決定的な「はい」は、彼女のすべて、全存在を神のみ旨に完全に開放するものでした。それは全面的な従順と信頼の行為でした。マリアは神の計画に自分のいのちを委ねたのです。聖霊の力によって、マリアは人となられた神の御子を懐胎しました。神は彼女の胎の中で肉を受け取られました。マリアは神にその人間性を与えました。そして、信仰のうちに、歴史のうちでの御子の救いをもたらす宣教に、マリアは自分のすべてを結び合わせました。

マリアの生涯においてそれに続く事柄——エリサベト訪問、彼女の胎内の子についてヨセフに与えられた啓示、ベトレヘムでのイエスの誕生、神殿でのわが子の奉獻とシメオンの預言、賢者の来訪とそれに続く聖家族のエジプトへの避難、見失った少年イエスをエルサレムで発見したこと、起こった出来事の多くを理解できずにいたこと、出来事とことばとをその心の内に思い巡らしていたこと——は、彼女の福音活動でした。このようにして、マリアの信仰、弟子としてのあり方、そして何よりも彼女が運命づけられていたとおりに、霊的に母として形づくられたのでした。

マリア——福音化する方。エリサベト訪問にあたって、マリアはその胎内に子を宿して、ユダの山地へと赴きました。マリアと対面して、子を宿していたエリサベトは「聖霊に満たされ」、彼女の胎内

の子は聖霊によって躍動しました(ルカ 1・41、44)。そして、エリサベトは「信じたあなたは、何と幸いなことでしょう」(同 45)とマリアに語り、マリアは「わたしの魂は主をあがめます」(同 46)と応えました。マリアは、聖霊によってその心の内で思い巡らしていたことばの宝庫から引き出してきて、よい知らせとして、人類への福音として、それを宣言するのです。

定められた時になると、マリアは自分の胎内で肉となられた御父の御子を出産されました。マリアはイエスをわたしたちに与えてくださったのです。マリアは賢者たちと羊飼いたちの前にイエスを掲げました。マリアは老シメオンの腕にイエスを置き、彼は神の約束が実現したことを喜びのうちに知りました。マリアの願いが、カナの婚宴で御子の最初のしるしをもたらしました。マリアの最後の言葉は召使いたちに向けられた、「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」でした。マリアはこの同じ言葉を、その後のすべての時代の人々に言い続けているのです。

御子が群衆に説教しておられたとき、マリアはそのことばを聞き取り、心の内でそれらを思い巡らしていました。その結果、その後、生まれたばかりの教会とそれらをつかち合うこととなります。使徒たちの母であるマリアは、火の舌のようなかたちで使徒たちのもとに聖霊が降られたとき、彼らの真ん中におられました。その日、聖霊によってかづけられて、教会は初めて全世界に向かってよい知らせを告げ知らせたのでした。

したがって、マリアは福音化された最初の方、最初の弟子であり、同様に最初の使徒でもあります。使徒たちの時代から世の終わりのときまで、マリアは福音化する教会——宣教の内にある教会・宣教に向かう教会(the Church-in-mission) に現存し続けるべき方なのです。

B 教会の宣教としての対話におけるマリア

アジアの多種多様な文化とともに。アジアの多種多様な文化のただ中での教会の宣教において、マリアは真正なキリスト教のあかしの模範です。それはアジアの多文化という環境において、知的論証以上に、福音と神の国をのべ伝える興味をそそらせる、説得力ある模範です(132)。それは、困窮のうちにある隣人を助けるために急いで駆け寄るように人を駆り立てる神との親密で不解消の交わりから流れ出るあかしです(133)。妊娠の最も気をつけなければならない段階にある従姉(いとこ)を訪問するという話、カナでの婚宴において若い花嫁と花婿とが恥ずかしい思いをすることから救うために介入するという話は、教会が持たなければならないこの宣教の熱意を美しく描写しています。祝福された母から、教会がまず第一にその行動と生き方——人々への配慮、貧しい人々への愛、貧しさと解脱によるあかし、この世の権力を前にして自由であること、聖性のあかし——によって学ぶことは、彼女が世界を福音化するであろう、ということです(134)。「キリスト者たちは周囲の人々の心に、次のような問いかけを必ず起こさせる。『なぜ、この人たちは、このように暮らすのだろうか』」(135)というように、生き方によるあかしを、教会はマリアのうちに見ているのです。

他の宗教的諸伝統とともに。アジアの多宗教という状況において、マリアの人となり(person)と役割は他のさまざまな信仰を信奉する人々の間での結束点となるでしょう。なぜなら、宗教と文化の違いを超越した母性の普遍的な価値がマリアのうちに輝いているからです。それゆえ、「アジアの各地には、何百ものマリアの礼拝堂や聖地があり、そこにはカトリック信者ばかりか他の宗教の信者も参拝に来て」(136)いることも別に驚くべきことではありません。マリアは救い主の御母、教会の御母である前に、アダム最初の娘であり(137)、それゆえ、他の諸宗教の信奉者たちを含めて、残り的人类家族と共通の本性と尊厳とを共有しているのです。他の信仰を信奉している人々は彼女の人となりのうちに信仰の模範を見るのに何の困難も感じません。マリアの人となりは、アジアにおいて最大の信

奉者を擁する大宗教の一つであるイスラム教と誠実な対話に教会が入っていくことができる領域の一つなのです。イスラム教の人々もまたマリアを尊び、時には彼女に敬虔に祈りさえするからです(138)。

他の信仰を信奉する人々との教会の対話での第一の主要な要素であるあかしは、マリアの生涯と宣教の内に模範と示唆を見いだします。人間の運命を高めるにあたっての神の意志への静かな奉仕と誠実な協力に特徴づけられるマリアの生涯は信仰に導かれ、神のみことばの傾聴と観想によって生まれたものですが、それはまた他のさまざまな宗教的伝統のただ中で宣教する・宣教に出向く教会 (the Church-in-mission) にとっての方法でもあります。

貧しい人々とともに。マリアは、貧しい人々に対する神と教会の優先的な愛を具現しています。彼女は貧しい人々と困難のうちにある人々を支えるために効果的に奉仕する女性です。それはエリサベト訪問、カナの婚宴での若い夫婦のための介入によって明らかに示されています。マリアの模範は、わたしたちの兄弟姉妹がわたしたちを必要としている所に急いで駆け寄り、立ち合い、抑圧から解放し、困難に直面しているときに慰め力づける神のよい知らせを告げ知らせるようにわたしたちに語りかけています(139)。マリアのうちに宣教する・宣教に出向く教会 (the Church-in-mission) は、貧しい人々の状態を真に向上させる奉仕と共苦共感 (compassion) の具体的な活動に取り組むように、正義を追求する手段を持たない人々のために正義を起ち上げる原動力となるように、生きていくうえで最小限のものしか持たない人々をも含めて、あらゆる人が自分たちの人間としての生き方と尊厳とを完全に享受できる社会を築き上げるために働くよう自分に命じる母親と出会うのです。貧しい人々はマリアのうちに、あらゆる人のもとに、とくに彼女を最も必要としているのですから、彼女の子どもたちの中でも最も小さな人々のもとに出向いていく母親と出会うのです。

このような貧しい人々への優先的な愛は、「マリアの賛歌」のうちに素晴らしい形で描き出されています(140)。あらゆる女性とあらゆる時代の人々のなかで、身分の低い自分に恵みを注いでくださった神を賛美します。しかし、あらゆる時代を通じて貧しく恵まれない状態にあるがゆえに取り上げてくださった神をほめたたえます。神は思い上がった心の人を打ち散らし、権力ある者をその座から引き下ろし、身分の低い者を高く挙げ、飢えた人を良いもので満たし、富んで満ち満ちた者を追い払われたのです (ルカ 1・51-53 参照)。

若者ととともに。「婦人よ、ご覧なさい。あなたの子です」(ヨハネ 19・26) と仰せになって、キリストが若い弟子をご自分の母に十字架のもとで託されたように、この [アジアの] 大地の多くの若者たちと子どもたちを教会は祝福された御母に託します。それと同時に、若いイエスと同じように、その成長段階において、現代の若者と子どもらが「神と人々の前で知恵と年齢と恵みにおいて」(ルカ 2・52) 成長するように養成され、自分自身を見いだし、教会と世界における自分の特別な召命を識別していくとき、「ご覧なさい。あなたの母です」(ヨハネ 19・27) という十字架のイエスのことばをもって、教会は彼らをマリアへと向かわせます。現代の多くの若者たちは社会と教会にとって希望の源泉とみなされる一方、彼らの多くが「世界の不安と失望、悩みと恐れ、そのうえに青年期特有の誘惑を抱えている」(141)のを認め、教会は彼らに、その宣教の初めから十字架上での頂点に至るまで御子に同伴し通したマリアの姿を提示するのです。マリアのうちに、彼らは、受肉した神の御子に行われたと同様に、自分のことを心配し、養い、導いてくれる母を見いだすにちがいません。マリアとともに、教会は、この方だけが道、真理、いのちであるキリストに現代の多くの若者を向かわせます。そして言います、「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」(ヨハネ 2・5)。

C 教会の宣教におけるマリアとエウカリスティア

マリアのエウカリスティアとの特別な関係によって、その内に教会の福音化する戦況の源泉と頂点とを見いだすために、マリアはわたしたちをこの至高の秘跡へと導いてくださいます。おとめであるその胎内で、神の御子は御父の愛の秘跡とした人間の本性を受け取られたように、エウカリスティアにおいて、キリストは秘跡としての教会（the sacramentality of the Church）を通して——奉仕者の存在（the person）において、みことばの宣言において、祈り歌う集会において、そしてとくにエウカリスティア（聖体）の両形態において——御父の秘跡であり続けられます(142)。「わたしたちのために [いけにえとして] 引き渡され、秘跡のしるしのもとに現存する [この主の] からだは、マリアが胎内に身ごもったからだと同じものなのです」(143)。十字架上で自己犠牲によって世のいのちのための、いのちを与えるパン、いのちのパンとしてご自身をお与えになる御子との緊密な結びつきによって、剣が彼女の心を刺し貫くというシメオンの預言は成就したのです（ルカ 2・34—35 参照）。

マリアの学び舎から。「エウカリスティアの女性」（聖体に生かされた女性）であるマリアの学び舎から教会は、注意深く、観想的でありつつも行動的な参加、世界と全人類に対する物惜しみしない配慮、全人類が希望する終末の実現への開かれた態度といった、あがないの秘義を実り豊かに執り行い、現実のものとするために必要かつふさわしい準備を学ぶことができます(144)。マリアは、愛と奉仕の業において具体化され、終末の希望へと開かれたものとするエウカリスティアによる礼拝を体現しています。礼拝にあずかる敬虔なキリスト者にとって、みことばに耳を傾け、それを心に収めることにおいて、自分自身に、そして他の人々に恩恵を注いでくださった神を賛美し感謝することにおいて、出会うすべての人にキリストとキリストの喜びと救いの賜物をもたらすことにおいて、すべての人が必要としているものために祈り執り成すことにおいて、秘跡を通して受け取る恵みのいのちを育むことにおいて、御父にご自身をささげるキリストとともに自分自身をささげることにおいて、主の到来を懇願することにおいて、目を覚ましてその到来を待ち望むことにおいて、マリアは模範として立てられます(145)

「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」。この言葉をもって、マリアは御子の教会に、「御子の記念として」、最後の晩餐とゴルゴタの丘で御子が行われたことを行うようにという御子の命令に留意するよう語り続けておられます。そして同時に、その使徒的宣教において静かではあるが行動的な参加によって、この至高の秘義にあずかるようにマリアは教会を鼓舞します。使徒たちの宣教において師となり導き手となるはずであると約束された聖霊（ヨハネ 14・16—17、16・13—14 参照）の到来を熱心に祈っていたとき（使徒 1・14 参照）、マリアは御子の使徒たちとともにおられました。マリアは「パンを裂くこと」（使徒 2・42）に熱心であった最初のキリスト者の世代とともにおられたに違いありません。マリアは、教会の母として、わたしたちがエウカリスティアを祝うたびに、教会とともに、いつもそこにいてくださいます(146)。したがって、教会は、マリアの祈りを乞い求めること（ミサの「回心の祈り」）を止めず、（奉献文の中で）マリアを尊ぶことを止めないのです。「聖霊のうちに、御子を通して、神によって行われた救いの諸々の秘義を最も崇高に祝うものであるエウカリスティアは、それらの秘義と不解消に結ばれていた救い主の聖なる御母を必然的に思い起こさせる」(147)ものだからです。

最後に、マリアとともに教会は、かつて祖先たちになされた約束の成就として救いの歴史において神によってなされた驚くべきみわざを思い起こしつつ、キリストのあがないのための受肉という驚嘆すべき神秘を宣言しつつ、栄光の終末的な希望を待ち望みつつ、マリアの「賛歌」のように、エウカ

リスティアを歌うのです(148)。

十 栄光の希望

わたしたちの旅の終わりにあたって、エウカリスティアがどのようにして、主の来臨を先取りするものとして、神の栄光を時間と歴史のなかに現しているのか発見するために、「あなたがたの内におられるキリスト、栄光の希望」という使徒 [パウロ] の言葉に戻ることにしましょう。

A エウカリスティアと神の栄光

聖変化の後の、エウカリスティアの集会の歓呼は、主の食卓にあずかることによって表明される終末論的な方向性をみごとに表現しています（一コリント 11・26 参照）。わたしたちは、「キリストが再び来られるまで」、その死と復活を宣言します。エウカリスティアは目標に向かっての緊迫状態であり、キリストによって約束された完全なる喜び（ヨハネ 15・11 参照）を前もって味わうものです。ある意味で、それは最終的な御国の先取り、「将来の栄光の担保」(149)なのです。「わたしたちの希望救い主イエス・キリストが来られるのを」(150) 信頼を込めて待っているのです。

宣教の種であると同時に目標でもあるエウカリスティアは、その受難と死、その栄えある復活というキリストの過越の秘義の中心に位置する神の栄光の体験を現しています。わたしたちに神の栄光が啓示されたのは十字架の上でのことです。そこにおいて御父は御子の内にご自分の慈しみに満ちた御顔と、ご自分の被造物と被造界との救いのために死に至るまで高められたご自分の愛をお示しになるからです。

それゆえ、「あなたがたの内におられるキリスト、栄光の希望」という言葉によってわたしたちに啓示されるのは、イエスの過越の秘義において実現された救いの計画全体、時間と歴史という要素を通して、この世界の内に現存し続けるものの、キリストが御父に御国を引き渡されるときに成就される計画以外の何ものでもないのです。

日曜日ごとに、主のみ名によって集まったわたしたちは、エウカリスティアのたびごとに神の栄光を祝うのです。十字架につけられたあのイエスとわたしたちは今出会うのです、復活され、生きておられる方、ご自分を十字架につけた世界の前に復活された方として。今や、死は愛によって喜ばしいものとされ、わたしたちの復活は、イエスが愛したように愛する努力の内に明らかにされます。「グローリア・デイ・ヴィヴェンス・ホモ。ヴィタ・アウテム・ホミニス・ヴィジオ・デイ——神の栄光は完全に生きる人間、人間のいのちは神を視ることにある」(151)。

B メシアの祝宴

今なお到来しつつある御国の将来の栄光が意味するものは、そこにおいてすべての民族と諸国の民のために準備されたメシアの盛大な祝宴によって宣教が完結される、神の聖なる山へ向かっての人々の終末的な巡礼という象徴をもって預言者は描写しています。

「万軍の主はこの山で祝宴を開き
すべての民に良い肉と古い酒を供される。
それは脂肪に富む良い肉とえり抜きの酒。
主はこの山で
すべての民の顔を包んでいた布と

すべての国を覆っていた布を滅ぼし

死を永久に滅ぼしてくださる」(イザヤ 25・6—8)。

この最終的な祝宴の預言するところのエウカリスティアは、「成就された宣教の秘跡」として現れ出ます。そこにおいて人類の共通の願望は満たされます。すなわち、神との交わりと普遍的な兄弟性、神がすべてにおいてすべてとなられるとき、そのところに〔実現するのです〕。

「そこで、聖なる山の上で、主のみ前で決定的な祝宴を祝うために、あらゆる国々の民が集まるでしょう。彼らは神の御顔を熟視するでしょう。彼らは神の民となり、清い唇をもって神を賛美するでしょう、『あなたは偉大な〔神〕、驚くべき御業を成し遂げられる方、ただあなたひとり、神』(詩 86・10)。そして世界のすべての国々に、あらゆる境界を超えた、驚くべき祝福をもって神はそれにお応えになるでしょう、『祝福されよ、わが民エジプト、わが手の業なるアッシリア、わが嗣業なるイスラエル』と(イザヤ 19・25)」(152)。

エウカリスティアのうちに存在する終末論的緊迫感は、それぞれ自分に特有の役務を果たす日々の生活において、生き生きとした希望の種を蒔きながら歩む、わたしたちの歴史のなかでの旅路を力づけてくれます。キリスト者は「新しい天」と「新しい地」とを待ち望みつつも(黙示 21・1)、地球の市民としての自分たちの義務を果たし損なうことのないように努めることで、現在の世界に対する責任感をかき立てるのです。この歴史的な時点において、キリスト者はルカによる福音の光のもとに、神の御旨に完全に応えて、人々のために、この世界を作り上げることに貢献しているのです。

国際聖体大会の式典は、すべての人が招かれている、時の終わりの決定的な祝宴を先取りするものです。

C 神の愛は人類を抱きしめる

わたしたちは、イエス・キリストが現存される秘跡であるエウカリスティアに戻ります。そこにおいて、主は、すべての国の人々を抱きしめ、まだ全面的とはいえないものの、全被造界の一致を実現されます。宣教は、その本質において、時の終わりのメシアの盛大な祝宴を待つ望みつつ行う仕事です。この運動は、主の御からだと御血の食卓を囲んで集まったあらゆるエウカリスティアの集会にその発端を有しています。

エウカリスティアにあずかる人々にとって、「再び来られるまで」(一コリント 11・26) 主の死を告げ知らせることは、その人々のいのち・生き方の変革に委ねること、つまり彼ら自身が「エウカリスティア」となることを必然的に伴います。この世界の福音的な変革のための役務と結びついた、存在のこの変容こそがまさしく、「主イエスよ、来てください」(黙示 22・20) というエウカリスティアの祝いと、キリスト者の生き方全体の終末論的緊迫感を現しているのです。

わたしたちの時代において差し迫った課題となっていることが多々あります。平和、正義、さまざまな国々の人々との間の連帯性、人間の生命の擁護〔がそれです〕。また、わたしたちのグローバル化した世界の天を曇らせる多くの矛盾が存在します。そこでは弱い人々、最も小さな人々、最も貧しい人々がほんのわずかな希望しか持てずにいます。ここで今、キリスト者の希望は輝きを発しなればなりません。このためでもあるのです、その愛によって新しいものとされた人類への約束とともに、ご自分の現存を刻みつけつつ、主がエウカリスティアのうちにあって、わたしたちとともに留まり続けようとするのは。ヨハネの福音が、エウカリスティアの制定の記述に替えて、「足を洗う」話を置いていることは、重要な意味を持っています。そこで、イエスは交わりと奉仕の教師とされているのです(ヨハネ 13・1—20 参照)。そして、使徒パウロもまた、貧しい人々に対する差別と無関心の中でそれが行われるときは、主の晩餐における交わりにふさわしくなくあずかっていると云います(一

コリント 11・17 以下参照) (153)。

エウカリスティアにおいて、文化——言語、歴史、伝統——の相違は人間の豊かさの、人類への賜物の計り知れない多様性と財産の現れとして受け容れられます。この相違はキリスト者の一致を妨げるものではなく、むしろ豊かにし、具体化する（完成する）ものなのです。

「国々はあなたの照らす光に向かい
王たちは射し出でるその輝きに向かって歩む。
目を上げて、見渡すがよい。
みな集い、あなたのもとに来る。
息子たちは遠くから
娘たちは抱かれて、進んで来る。
海からの宝があなたに送られ
国々の富はあなたのもとに集まる」(イザヤ 60・3—5)。

「国々の富」とはさまざまな文化と宗教的体験にはかなりません。それらは、さまざまな国の人々が、自分たちの知性と技術が造り上げた、彼らの知恵とこの世的の伝統の宝庫、人間存在の多様な具体的な方法なのです。

そこにおいてキリスト者の交わりはあらゆる人間的な境界を超えることになるメシアの祝宴が用意されているのですが、既に今、エウカリスティアの集会において、さまざまな倫理的、経済的、政治的、そして社会的な文化は、聖霊によって、感謝の内に、新しい文明を指し示すものへと変容されるのです。

あらゆるミサにおいて、わたしたちの道を照らす預言の言葉をもって、神はあらゆる民族と国々との上に祝福のことばを発しておられます。「祝福されよ、わが民エジプト、わが手の業なるアッシリア、わが嗣業なるイスラエル」(イザヤ 19・25)、「祝福されよ、わが手の業なるロシアよ、ソマリアよ、ポリビアよ、中国よ、祝福されよ、フィリピンよ、わが嗣業なるフィリピンよ…。アーメン、アーメン(154)。

(128) 『アジアにおける教会』 51

(129) 『典礼憲章』 103

(130) 『福音宣教』 15

(131) 『福音の喜び』 284

(132) 『福音宣教』 42。教皇ヨハネ・パウロ二世『救い主の使命』 42

(133) 『福音宣教』 41 参照

(134) 『福音宣教』 41、『救い主の使命』 42 参照

(135) 『福音宣教』 21

(136) 『アジアにおける教会』 51

(137) Paul VI, Exploring the Mystery of the Church. Address of Pope Paul VI at the Close of the Third Session of the Second Vatican Ecumenical Council (November 21, 1964) 参照

(138) 『キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言』 3 参照

(139) 1971 Synod of Bishops, “Justice in the World”, Introduction

(140) 教皇ヨハネ・パウロ二世『救い主の母』 37

(141) 『信徒の召命と使命』 46

- (142) 『典礼憲章』 7 参照
- (143) 教皇ヨハネ・パウロ二世『教会にいのちを与える聖体』 56
- (144) 前掲書 53
- (145) Congregation for Divine Worship, Orientations and Proposals for the Celebration of the Marian Year 1987—1988 (3 April 1987) 参照
- (146) 『教会にいのちを与える聖体』 57
- (147) Congregation for Divine Worship, Orientations…cit,19. 『典礼憲章』 103、『教会憲章』 53、57 参照
- (148) 『教会にいのちを与える聖体』 58 参照
- (149) キリストの聖体の祭日の「晩の祈り」の「マリアの賛歌」の交唱 [規範版より]
- (150) ミサの式次第、「主の祈り」の後の「副文」
- (151) リヨンのエイレナイオス (イレネオ) 『異端反論』 四・20・7
- (152) Jame Cardinal L.Sin, The Eucharist: Summons and Stimulus, Call and Challenge to Evangelization, in Christ, Light of Nations, 45th International Eucharistic Congress; Città del Vaticano 1994,p.764
- (153) 『教会にいのちを与える聖体』 20 参照
- (154) Jame Cardinal L. Sin,cit.,p.766